



表紙 千代ヶ崎砲台跡 第一砲座

裏表紙 猿島砲台跡 第一砲台塁道



史跡東京湾要塞跡

猿島砲台跡

千代ヶ崎砲台跡

保存活用計画

平成 29 年（2017 年）3 月

横須賀市教育委員会

発刊のことば

横須賀市は、相模湾と東京湾に挟まれた三浦半島の中央部に位置していることから、古来より人や物の流通する中心地として栄えていました。江戸幕府が開かれると、18世紀には浦賀地域が廻船の船改めを行う奉行所を中心として栄え、幕末には現在の在日米海軍横須賀基地内に横須賀製鉄所が建設されます。



この横須賀製鉄所が明治政府に引き継がれ、海軍の要衝として鎮守府が置かれました。そのため、それ以降横須賀は海軍の街として独自の発展を遂げてきました。

一方、横須賀は東京湾内湾の入り口に面しているため、首都東京を守る最終防衛ラインでもありました。明治政府は東京湾防備のため東京湾要塞の建設を決定し、その最初にして中心地はやはり横須賀でした。現在でも多くの砲台跡が市内各所に残されており、痕跡をうかがうことができます。

横須賀市としても、明治の人々が建設したこれら砲台群を貴重な文化財と考え、学術的な調査を実施しました。それらの成果の中で、建設当初の遺構が良好に残り、建設素材は煉瓦のみで造られた施設からコンクリートを使用した施設へ、煉瓦組積方法の面からは、フランス積みからオランダ積みへ等の技術変遷がわかる貴重な遺跡として、平成27年3月に対外的な防衛遺構としては初めての「史跡」として指定されました。

教育委員会としては、今後この貴重な史跡の本質的な価値づけをおこない、史跡全体を後世に良好な状態で伝えていかなければならないとの思いから、地元住民、学識経験者等で構成される「国指定史跡東京湾要塞跡保存活用計画策定委員会」を設置し、史跡保存と活用の基本方針を定める「保存活用計画」を策定しました。

今後はこの計画に基づき、史跡の適切な保存を行いながら、整備・活用をはかることにより、史跡を活かした地域のまちづくりにつなげたいと考えております。市民の皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

本計画の策定にあたり「国指定史跡東京湾要塞跡保存活用計画策定委員会」の委員の皆様には、多大なご尽力をいただきました。改めて厚く御礼を申し上げます。

また、ご指導、ご協力を賜りました文化庁、神奈川県教育委員会にも深く感謝申し上げます。発刊にあたってのことばといたします。

平成29年3月

横須賀市教育委員会

教育長 青木 克明

例 言

1. 本書は、神奈川県横須賀市に所在する「史跡東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡」の保存活用計画事業の報告書である。東京湾要塞跡に属する砲台跡は、観音崎砲台跡、走水低砲台跡、夏島砲台跡等の他、千葉県富津元州砲台跡等にまたがる広大なエリアに点在しているが、現在史跡指定を受けているものは猿島砲台跡、千代ヶ崎砲台跡のみである。本計画の対象は基本的には既指定の2砲台跡のみであるが、将来的には指定地域の拡大、追加指定等が予想されるため、一部の内容においては東京湾要塞跡全体に及ぶ。
2. 本計画の策定事業は、国庫補助金ならびに神奈川県交付金を受け、平成 28 年度に横須賀市教育委員会が実施し、一部を株式会社文化財保存計画協会に委託した。
3. 計画策定にあたっては、「国指定史跡 東京湾要塞跡保存活用計画策定委員会」を設置し、検討を重ね、文化庁、神奈川県教育委員会から指導・助言を受けながら策定した。
4. 本書に掲載した千代ヶ崎砲台跡の地形図は、千代ヶ崎砲台跡を中心とした周辺約 305,000 m²の地形測量(1/500)を、朝日航洋株式会社に委託して作成したものである。
5. 本書は、横須賀市教育委員会教育総務部生涯学習課文化財係が執筆・編集した。

目 次

- ・ 発刊のことば
- ・ 例 言

第 1 章 保存活用計画策定の目的と経緯 …………… 1

- 第 1 節 保存活用計画の目的 …………… 1
- 第 2 節 保存活用計画策定に至る経緯 …………… 1
 - 1. 史跡指定とその対象 …………… 1
 - 2. 保存活用計画策定までの経緯 …………… 4
- 第 3 節 保存活用計画策定事業の経過 …………… 4
 - 1. 委員会の設置と協議経過 …………… 4
 - 2. 地形図の作成 …………… 6
 - 3. 現況調査の実施 …………… 6

第 2 章 史跡の概要…………… 7

- 第 1 節 社会的概況 …………… 7
 - 1. 横須賀市の概況 …………… 7
 - 2. 史跡周辺の概況 …………… 9
 - 3. 関連法規 …………… 12
 - 4. 関連計画及び事業 …………… 12
- 第 2 節 東京湾要塞跡の概要 …………… 13
 - 1. 指定までの履歴と現状 …………… 13
 - 2. 指定概要 …………… 16
 - 3. 歴史的背景 …………… 20
 - 4. 史跡指定地及び周辺における調査 …………… 29
 - 5. 遺構の状況 …………… 32
 - 6. 関連遺跡・文化財の状況 …………… 42
 - 7. 公有化状況 …………… 49
 - 8. 土地利用状況 …………… 49
 - 9. 活用状況 …………… 49

第 3 章 史跡の本質的価値 …………… 50

- 第 1 節 史跡の本質的価値 …………… 50
- 第 2 節 史跡の構成要素 …………… 51

1. 猿島砲台跡	51
2. 千代ヶ崎砲台跡	56
第4章 現状と課題	62
第1節 保存の現状と課題	62
1. 猿島砲台跡	62
2. 千代ヶ崎砲台跡	68
第2節 活用の現状と課題	71
第3節 整備のための現状と課題	72
第4節 運営・体制の現状と課題	72
第5章 大綱と基本方針	73
第1節 保存	73
1. 猿島砲台跡	73
2. 千代ヶ崎砲台跡	75
第2節 活用	76
1. 学校教育	76
2. 社会教育	76
3. 地域における活用	77
第3節 整備	77
1. 猿島砲台跡	77
2. 千代ヶ崎砲台跡	78
第4節 運営・体制の整備	78
1. 猿島砲台跡	78
2. 千代ヶ崎砲台跡	78
第6章 保存について	79
第1節 保存の方向性について	79
1. 猿島砲台跡	79
2. 千代ヶ崎砲台跡	79
第2節 保存の方法について	80
1. 地区区分	80
2. 煉瓦建造物の保存管理基準	84
3. 保存管理の方法	85
4. 現状変更及び保存に影響を及ぼす行為の取扱基準	89
5. 追加指定	96

6. 公有化	96
第7章 活用について	97
第1節 活用の方向性について	97
第2節 活用の方法について	97
1. 学校教育における活用	97
2. 社会教育における活用	97
3. 地域における活用	98
第8章 整備について	99
第1節 整備の方向性について	99
1. 猿島砲台跡	99
2. 千代ヶ崎砲台跡	99
第2節 整備の方法について	99
1. 保存のための整備手法	99
2. 活用のための整備手法	100
3. 整備事業の実施期間・手順等	101
第9章 具体的な管理・運営	103
第1節 猿島砲台跡	103
第2節 千代ヶ崎砲台跡	104
第10章 経過観察	105
第1節 保存に関する評価	105
1. 猿島砲台跡	105
2. 千代ヶ崎砲台跡	106
第2節 活用に関する評価	107
第3節 整備に関する評価	108
第4節 運営・体制に関する評価	108
・抄 録	
猿島砲台跡カルテ	
千代ヶ崎砲台跡カルテ	

第1章 保存活用計画策定の目的と経緯

第1節 保存活用計画の目的

史跡東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡（以下東京湾要塞跡と表記する）は、神奈川県横須賀市に所在する砲台跡である。

猿島砲台跡は、旧横須賀軍港に近い洋上の無人島である猿島に建設された砲台であり、1881年（明治14年）11月起工、1884年（明治17年）6月竣工した、要塞建設最初期に建設された砲台である。そのため、砲台としての防禦營造物が充分ではなく、竣工以降に多くの増改築工事が行われた。猿島砲台跡には明治10年代に建設された砲台主体部を基盤として、その後増改築された遺構が重層して残されている。同じく千代ヶ崎砲台跡は、1892年（明治25年）12月起工、1895年（明治28年）2月竣工した砲台である。猿島砲台跡など以前の時期に建設された砲台と比較して砲台構造の完成度が高く、諸施設も機能的に充実し、建築技術にも進歩が認められる。これらの砲台跡は築造当初の姿を良好にとどめており、我が国の近代軍事、築城技術の具体的様相を理解するうえで重要な遺跡であるとして、2015年（平成27年）3月10日に文部科学省告示第38号により史跡に指定された。

本計画は、東京湾要塞跡の的確な保存管理及び公有地化、公開活用の方針を示すことにより、将来的な整備活用を推進し、郷土愛を育み、地域の活性化に寄与することを目的とする。そのため、本書では、史跡の現状把握を通して本質的価値を明確化し、事業計画や管理・運営方針などについて示すこととする。

第2節 保存活用計画策定に至る経緯

1. 史跡指定とその対象

東京湾要塞跡は、前述のとおり文化財保護法（昭和25年法律第214号）第109条第1項の規定により、2015年（平成27年）3月10日に文部科学省告示第38号をもって史跡として66,595.04㎡（猿島砲台跡51,159.17㎡、千代ヶ崎砲台跡15,435.87㎡）が指定された。

指定理由としては、『東京湾要塞跡は、東に東京湾、西に相模湾を臨む横須賀市の東部、横須賀新港の沖合い1.7kmの猿島に建設された「猿島砲台跡」と、横須賀市東端部の浦賀湾口南岸の丘陵上に建設された「千代ヶ崎砲台跡」で構成される。猿島・千代ヶ崎両砲台跡は、明治時代、東京湾防衛のため西洋の築城技術を導入して築かれた東京湾要塞を構成する砲台跡である。猿島砲台跡は1881年（明治14年）11月起工、1884年（明治17年）6月竣工した、要塞建設期最初期の砲台である。島内には、砲座、弾薬庫等の砲台施設、砲台間を連絡する煉瓦造りの隧道（トンネル）、隧道内の二層構造の弾薬庫、電気灯機関舎、送電施設、海岸護岸等の施設が良好に残る。千代ヶ崎砲台跡は1892年（明治25年）12月起工、1895年（明治28年）2月竣工した砲台である。南北の直線上に1砲座2砲床の3砲座が配置され、砲座は西側

に平行して存在する塁道と地下交通路で連絡し、塁道から砲座間の地下には砲側弾薬庫、貯水所などの地下施設が付帯する。これらの砲台跡は、築造当初の姿を良好にとどめており、我が国近代の軍事、築城技術の具体的様相を理解するうえで重要である。』とある。

しかし、千代ヶ崎砲台跡に関しては、明らかに追加指定が必要とされる区域があり、また、東京湾要塞跡を構成する砲台跡は市内だけでも夏島砲台跡、走水低砲台跡、観音崎砲台跡等が指定に至らず、現在に至っている。

よって、本計画では史跡として既指定の東京湾要塞跡と近接する地域、今後追加指定すべき東京湾要塞跡の構成遺跡について策定範囲とする。

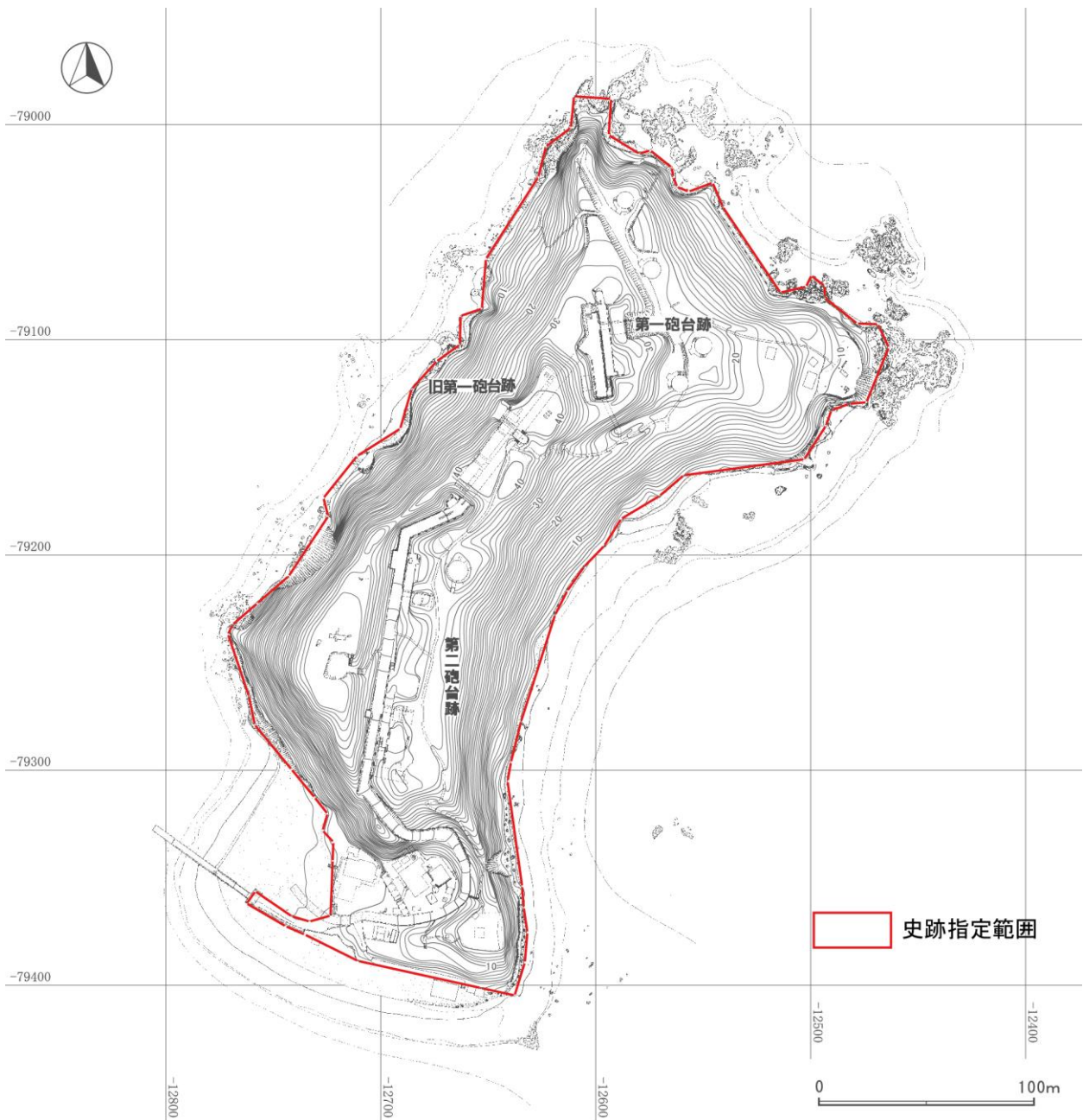


図1 猿島砲台跡地形図



図2 千代ヶ崎砲台跡地形図

2. 保存活用計画策定までの経緯

猿島砲台跡は、終戦後連合軍によって武装解除され当時の大蔵省の管理となった。1947年（昭和22年）に横須賀市は、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）が消磁場として使用していた以外の土地を大蔵省から借り受け、湘南振興株式会社へ委託して海上市民公園を運営した。その後、湘南振興株式会社から株式会社京浜急行電鉄へ委託先が変更になったが、1993年度（平成5年度）に一旦終了した。その後、1995年度（平成7年度）に横須賀市が財務省から管理委託を受け、2007年（平成19年）3月30日に横須賀市に無償譲与された。

千代ヶ崎砲台跡は、2008年（平成20年）4月、海上自衛隊横須賀地方総監部が千代ヶ崎送信所としての用途廃止を決定する。その後、国・県を交え、市の文化財部局と海上自衛隊との協議の結果、史跡指定の方向で合意した。

両砲台跡は、東京湾要塞跡として前述のとおり文化財保護法（昭和25年法律第214号）第109条第1項の規定により、2015年（平成27年）3月10日に文部科学省告示第38号をもって史跡として66,595.04㎡（猿島砲台跡51,159.17㎡、千代ヶ崎砲台跡15,435.87㎡）が指定された。

このような経緯を受けて、史跡を未来へ継承するために本保存活用計画を策定することとなった。

第3節 保存活用計画策定事業の経過

本事業は史跡等保存活用計画策定費国庫補助金の採択を受け、2016年度（平成28年度）に実施したものである。事業の詳細は以下のとおりである。本計画は2017年（平成29年）4月1日をもって効力を発する。

1. 委員会の設置と協議経過

国指定史跡東京湾要塞跡保存活用計画策定委員会は、2016年（平成28年）4月1日制定の「国指定史跡東京湾要塞跡保存活用計画策定委員会設置条例」を受けて設置した。委員会は市民公募委員2人、学識委員3人、行政委員3人で構成され、1か年で計6回の委員会を開催した。事務局は横須賀市教育委員会生涯学習課文化財係が担当した。計画の策定にあたっては、随時、文化庁、神奈川県教育委員会の指導、助言を得た。

表1 委員・助言者等名簿

区分	氏名	所属等	専門分野	備考
学識委員	後藤 治	工学院大学建築学部建築デザイン学科 教授	日本建築史	委員長
	鈴木 淳	東京大学大学院 教授	日本近代史	職務代理者
	大内田史郎	工学院大学建築学部建築デザイン学科 准教授	近代建築史	
市民委員	奥泉真奈美	市民公募		
	池田 直人	市民公募		
行政委員	北川 貴章	横須賀市教育委員会 教育指導課指導主事		
	佐藤 明生	横須賀市教育委員会 博物館運営課長		
	高畑 誠	横須賀市教育委員会 事務局主査		
指導・助言者	山下信一郎	文化庁文化財部記念物課史跡部門 文化財調査官		
	谷口 肇	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課		
	石原 孝造	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課		
	事務局	横須賀市教育委員会教育総務部生涯学習課		

委員会の協議経過の概要は、次のとおりである。

表2 委員会協議経過

開催回数	開催日	協議概要
第1回	2016年（平成28年） 6月27日	<ul style="list-style-type: none"> 保存活用計画策定の目的と経緯 保存活用計画の検討項目 東京湾要塞跡の現況 東京湾要塞跡の価値と重要性
第2回	2016年（平成28年） 8月19日	<ul style="list-style-type: none"> 検討項目の一部修正について 史跡の本質的価値 現状と課題
第3回	2016年（平成28年） 10月17日	<ul style="list-style-type: none"> 史跡の本質的価値の改定について 保存活用計画の大綱・基本方針
第4回	2016年（平成28年） 11月23日	<ul style="list-style-type: none"> 史跡の保存方針・史跡の活用方針 史跡の整備方針・管理・運営方針
第5回	2017年（平成29年） 2月10日	<ul style="list-style-type: none"> 保存活用計画の修正
第6回	2017年（平成29年） 3月13日	<ul style="list-style-type: none"> 保存活用計画策定

2. 地形図の作成

猿島砲台跡については、2006年度（平成18年度）に航空地形測量図を作成しているため、今年度は千代ヶ崎砲台跡指定地及び周辺地の約305,000㎡部分について航空レーザー測量により1/500測量図（図2）を作成した。

3. 現況調査の実施

各砲台跡の遺構についての現況を詳細に確認するために、以下の調査を実施した。

表3 現況調査

	調査日	場所	調査内容
1	2016年（平成28年） 7月1日	猿島砲台跡	・遺構の現況確認調査
2	2016年（平成28年） 7月8日	千代ヶ崎砲台跡	・遺構の現況確認調査
3	2016年（平成28年） 8月3日	猿島砲台跡	・遺構カルテ作成調査
4	2016年（平成28年） 12月21日	千代ヶ崎砲台跡	・遺構カルテ作成調査

第2章 史跡の概要

第1節 社会的概況

1. 横須賀市の概況

(1) 位置と地形

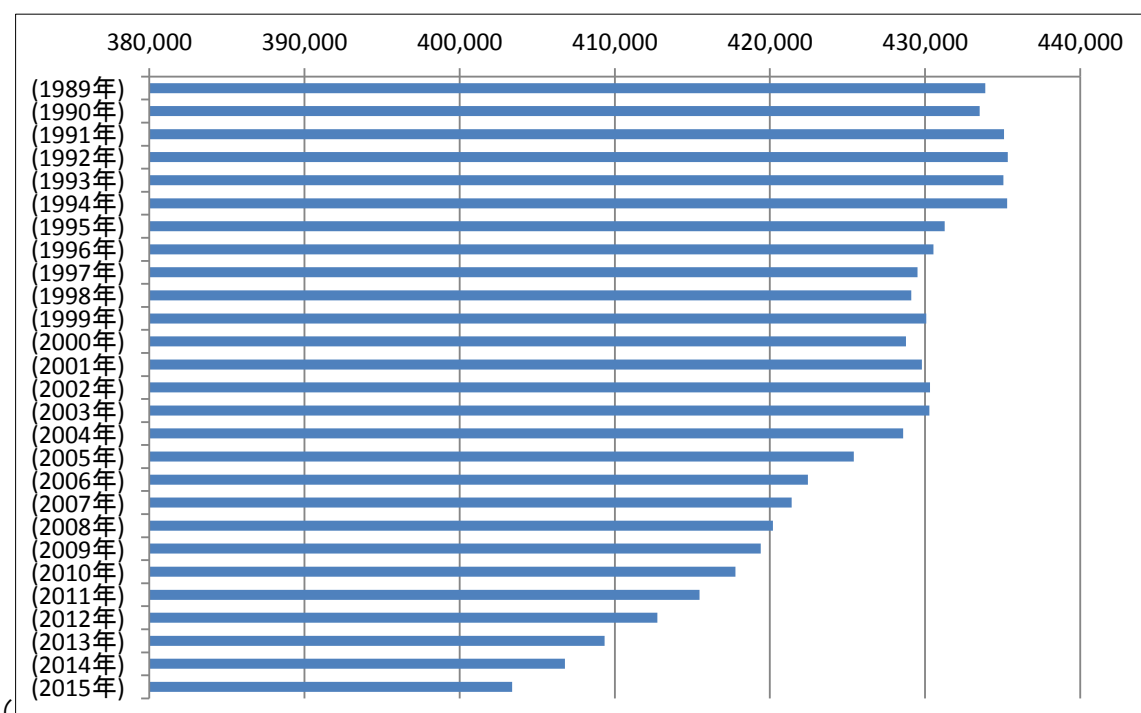
横須賀市は神奈川県南東部の三浦半島の中央部にあり、東は東京湾、西は相模湾に面している。標高 100～200m の起伏の多い丘陵や山地で構成されており、平野が少なく海岸沿いまで山が迫る地形である。



(2) 人口

2015年（平成27年）の住民基本台帳登録人口は403,386人である。人口は1992年（平成4年）をピークに減少傾向にある。加えて、少子高齢化が急速に進展しており、総人口に占める年少人口割合の低下傾向が続く一方、老年人口の割合については神奈川県の平均を上回るペースで上昇し続けている。また、生産年齢人口については、神奈川県より早い時期から減少傾向を示している。

表1 人口推移グラフ



東京湾に面する市の東側では、南部や北部で大手企業の工場や研究所が数多く立地する。また京浜急行横須賀中央駅等の主要駅の周辺では、商業機能の集積が見られる。市の西側では農業や漁業が盛んである。

市の経済はこれまで、自動車、造船などの大規模製造業にけん引され発展してきたが、産業構造の変化に伴い、情報通信産業の誘致を進めるなど、産業構造の多角化に努めている。近年は、観光振興にも力を入れている。

表2 事業所・従業員数の推移

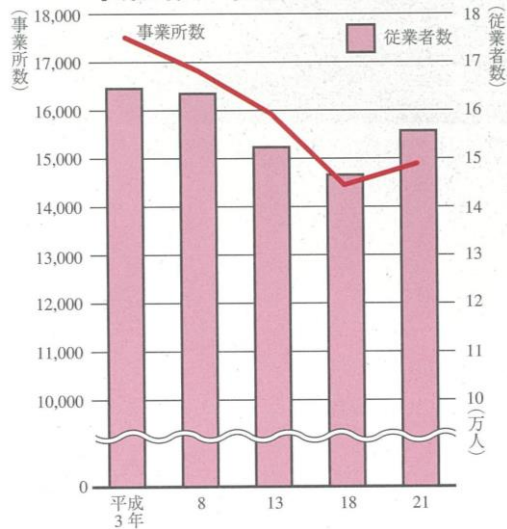
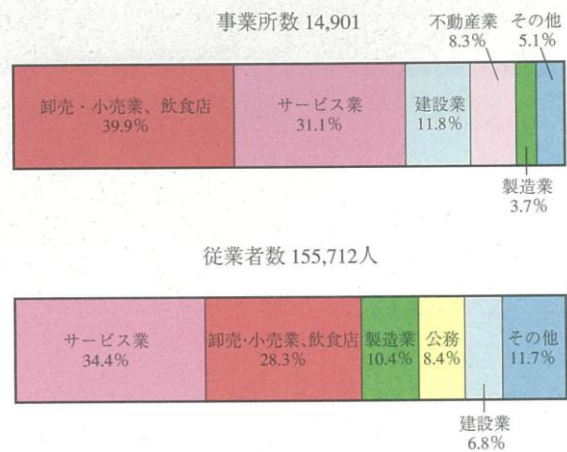


表3 産業別の割合 (平成21年)



(4) 交通

鉄道は、JR横須賀線と京浜急行線が通っている。道路は横浜横須賀道路等の地域高規格道路が整備されており、横須賀、衣笠、佐原、浦賀、馬堀海岸の五つのインターチェンジが存在する。これらによる東京都心までの所要時間は1時間～1時間15分程度である。また、東京湾の入口に位置し軍港都市として栄えた歴史を反映して、横須賀本港、長浦港、久里浜港、浦賀港などが存在し、久里浜港と千葉県富津市の金谷港を結ぶ東京湾フェリーが就航している。



図4 横須賀市の交通網 (広域)



図5 横須賀市の交通網 (市内)

2. 史跡周辺の概況

(1) 立地

① 猿島砲台跡

猿島は、横須賀新港沖 1.7 km の距離にある東京湾最大の自然島で、北緯 $35^{\circ} 17'$ 、東経 $139^{\circ} 40'$ に位置している。島の規模は東西約 200m、南北約 450m で、島の頂上部には標高 40 m 前後の南北に細長い平坦部が存在している。砲台跡はこの平坦部を中心に広く島内に分布する。

猿島への渡航は、横須賀新港の三笠桟橋より出港する連絡船を利用して約 10 分である。船は、3 月～11 月は毎日運航、12 月～2 月は土日祝日のみ運航となっている。

② 千代ヶ崎砲台跡

千代ヶ崎砲台跡の遺構は、横須賀市東端部に所在し、浦賀湾口の南岸の丘陵上にある。

斜面に自生する樹木により、眺望が阻害されている箇所があるが、眼下の東京湾から対岸の房総半島を遠望することができ、景観に恵まれている。

京急久里浜駅、JR 久里浜駅、京急浦賀駅からそれぞれ約 2 km の位置であり、最も近い公共交通機関施設は、徒歩約 15 分の位置にある京浜急行バスの燈明堂入口である。

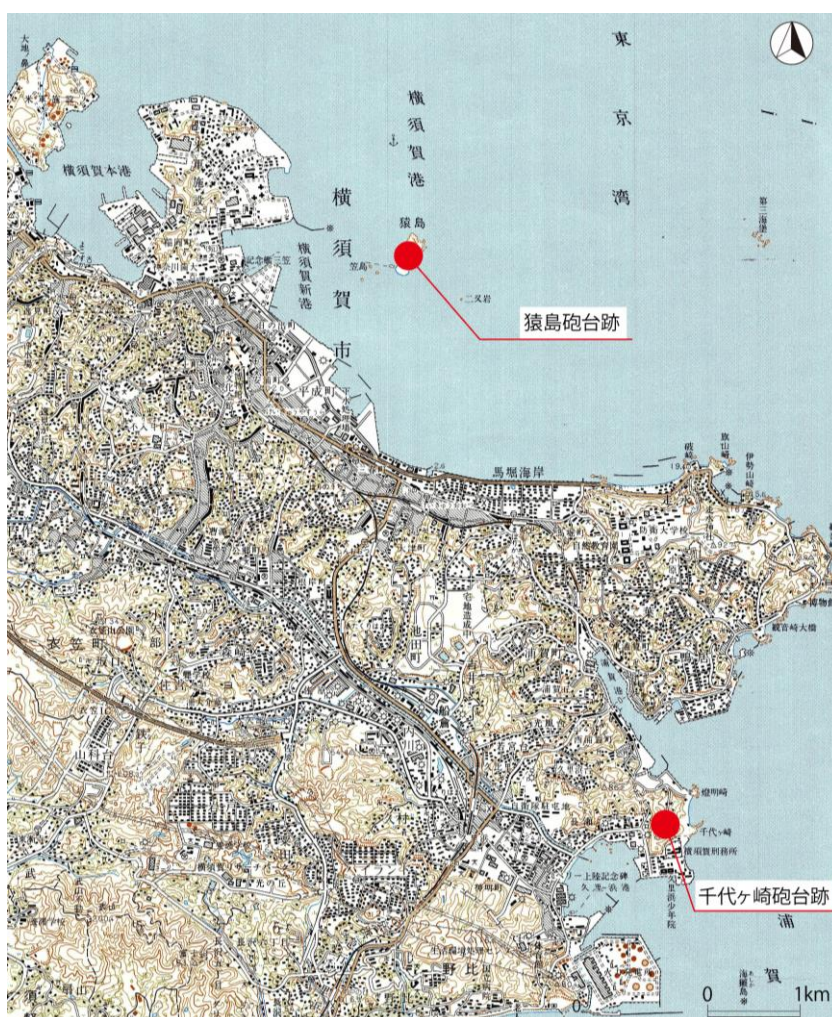


図6 猿島砲台跡と千代ヶ崎砲台跡の立地









图7 猿島砲台跡位置図



图8 千代ヶ崎砲台跡位置図

(2) 都市計画上の用途地域

猿島砲台跡が位置する猿島は、島全域が市街化調整区域である。また、千代ヶ崎砲台跡も史跡指定地とその周辺は市街化調整区域となっている。

史跡指定範囲	
第1種低層住居専用地域	
第1種住居地域	
準工業地域	
工業地域	
市街化調整区域	

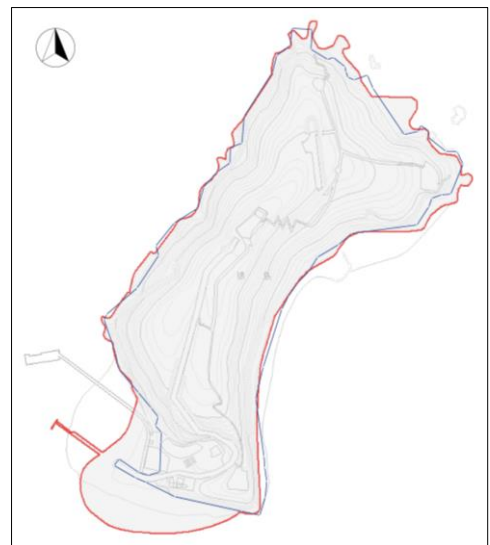


図9 猿島砲台跡周辺用途地域

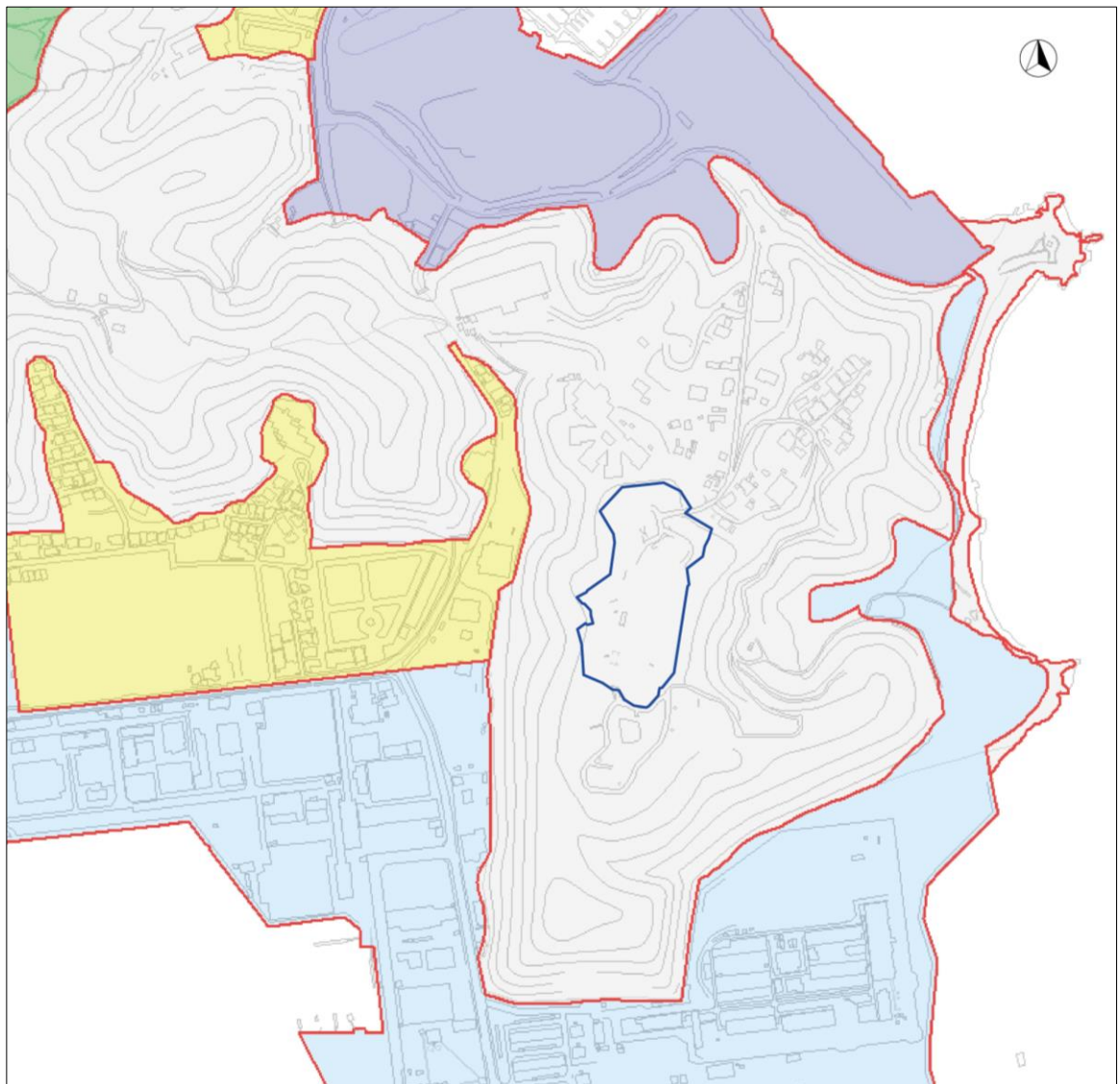


図10 千代ヶ崎砲台跡周辺用途地域

3. 関連法規

文化財保護法、都市計画法（市街化調整区域）、都市公園法（猿島）

史跡指定地内は文化財保護法により、現状変更に対する規制を受ける。また、猿島砲台跡については、史跡指定地が都市公園となっているため、都市公園法の適用範囲でもある。

猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡とも都市計画上の用途地域上は市街化調整区域となっており、規模の大小にかかわらず、開発行為を行おうとする者は、原則として都道府県知事から開発許可を受けなければならない区域となっている。

4. 関連計画及び事業

「横須賀市まち・ひと・しごと創生総合戦略」

横須賀市は、急激な人口減少、少子高齢化がもたらす負の影響を最小限にとどめ、将来にわたって活力ある地域経済・社会をつくるため、まち・ひと・しごと創生法に基づく国および県が定める総合戦略を踏まえて、平成 27 年度（2015 年度）から平成 31 年度（2019 年度）までの 5 カ年を計画期間とする「横須賀市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下「総合戦略」）を策定している。

その基本目標の 1 つに「市内経済の活性化を図り、雇用を創出する」があり、域外からの新たな需要の獲得（集客の促進と交流拠点の創出による市内消費の拡大）し、集客の促進と交流拠点の創出による市内消費の拡大を目指す。

施策としては、横須賀市が持つ特性を生かした新たな観光拠点・ストーリー性を持った周遊ルートを創出し、歴史的資源の活用や整備計画の策定・保存整備のための調査など、横須賀市の文化や歴史を生かした取り組みを推進する。

なお、東京湾要塞跡（猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡、走水低砲台跡を含む）も歴史的資源として当該施策に位置づけられている。

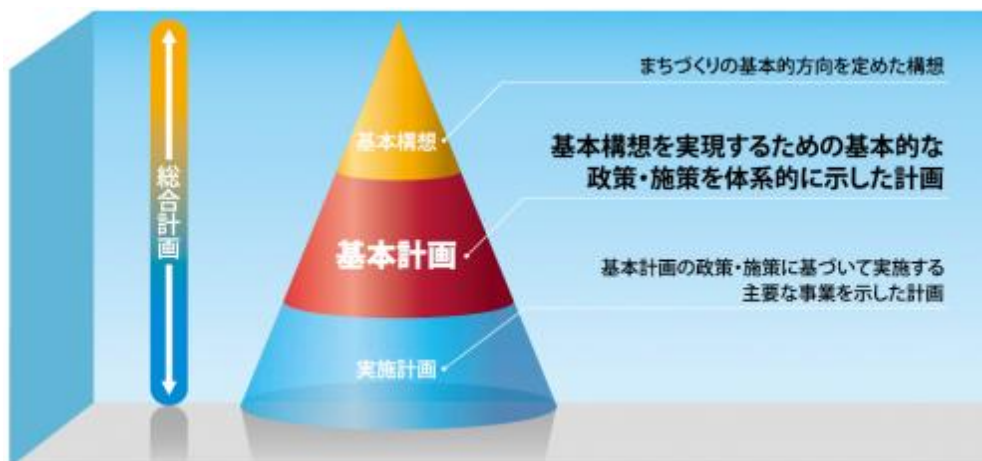
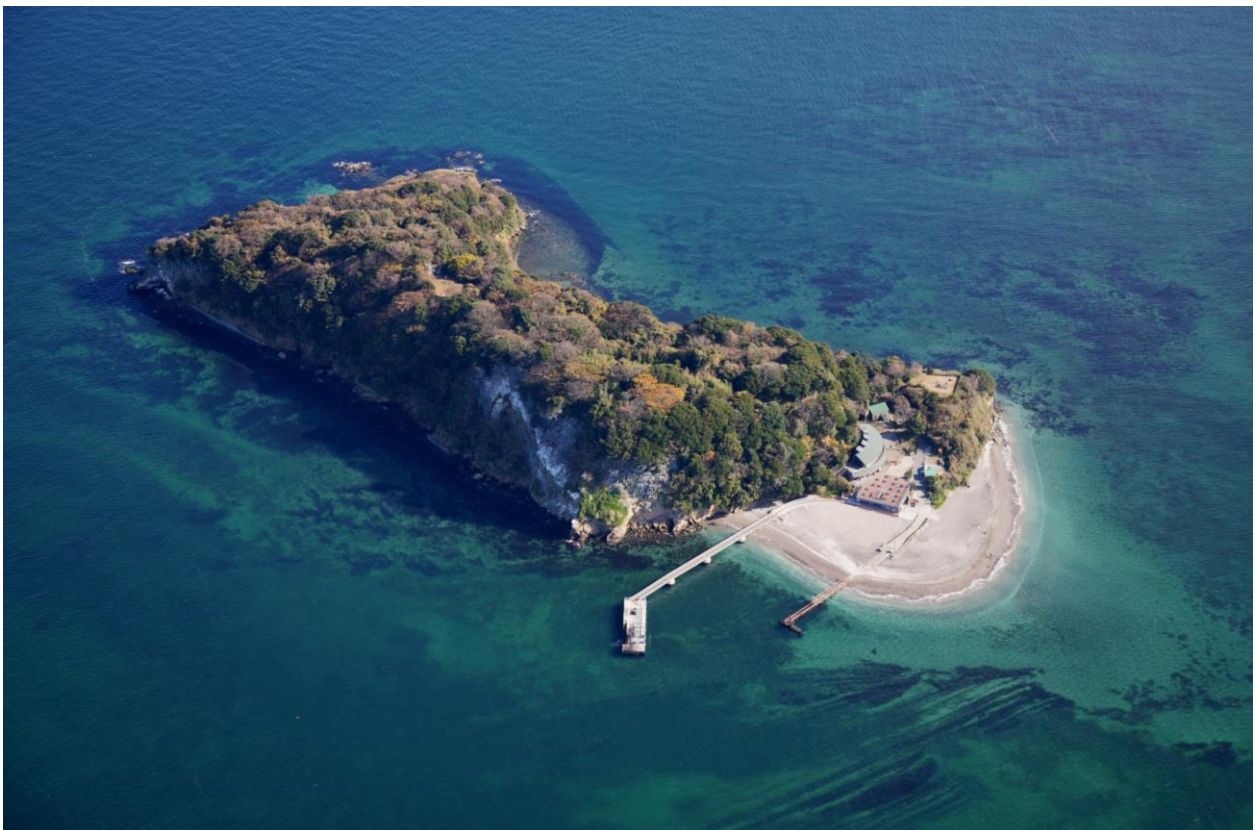


図 11 総合計画の構成



猿島航空写真 1955 年（昭和 30 年）



猿島航空写真 2014 年（平成 26 年）

(2) 千代ヶ崎砲台跡

千代ヶ崎砲台跡は、終戦後の1952年（昭和27年）に当時の農林省が開拓者に土地を払い下げ、養豚場としてその一部が利用された。終戦後の物資が不足していた当時、貴重であった鉄製品が、建具等から取り外された痕跡が残っている。この時期に、左翼観測所も取り壊され埋められたと考えられる。1960年（昭和35年）に海上自衛隊が用地を取得し、千代ヶ崎送信所として施設整備し、それ以降およそ半世紀にわたって運用されてきた。

2008年（平成20年）4月、海上自衛隊横須賀地方総監部から千代ヶ崎送信所の用途廃止について横須賀市に連絡があり、猿島砲台跡の史跡指定を目指し文化庁と神奈川県教育委員会と協議を進めていたことから、2008年（平成20年）7月に横須賀市文化財専門審議会において千代ヶ崎砲台跡の残存状況及び将来的な史跡指定について諮問を行なった。その結果、千代ヶ崎送信所の用途廃止と猿島砲台跡の史跡指定スケジュールを調整し、猿島砲台跡と千代ヶ崎砲台跡を同時指定すべきとの答申が出された。これを受けて、海上自衛隊と具体的な砲台構造物の保存について協議を始め、最終的に2010年（平成22年）11月に横須賀市長を含めた関係各部署で意見調整して、横須賀市の方針を決定した。その後、猿島砲台跡と併せて史跡指定を目指すため、改めて文化庁、神奈川県教育委員会と協議を行うこととなった。



海上自衛隊千代ヶ崎送信所時代の史跡内の様子

交通路合流地点北側土塁上から柵門方向を見る
（平成20年5月撮影）



史跡指定地北端に位置した送信所の建物外観
（平成20年5月撮影）

2. 指定概要

(1) 指定内容

東京湾要塞跡は、明治時代、首都東京と横須賀軍港等を防衛するため、東京湾岸一帯に築かれた陸軍要塞の遺跡であり、猿島砲台跡は横須賀市の横須賀新港沖合い 1.7 km の猿島に、千代ヶ崎砲台跡は同市東端部、浦賀湾口の南岸の丘陵上に位置する。

明治政府は、江戸幕府や諸藩等が海防のため設置した台場に代えて、西洋の築城技術を本格的に導入し、東京湾・対馬・下関・由良・広島湾・芸予・佐世保・舞鶴・長崎・函館等の軍事的要衝に要塞を設け、海岸砲台・堡壘等の施設を整備していった。そのうち、東京湾要塞は、近代日本で最初に建設された要塞であり、1880 年（明治 13 年）起工の観音崎砲台（神奈川県）を嚆矢として、明治 10 年代と同 20 年代後半には、富津岬（千葉県）・観音崎間の海峡で東京湾内湾への侵入を阻止する湾口防衛の沿岸砲台群が、同 20 年代後半には、海軍の鎮守府や海軍工廠が置かれた横須賀・長浦両軍港を防衛する砲台群が建設された。その後も改修等が進められ、大正期以降は、既存砲台の廃止や改築を行うとともに、東京湾外湾と相模湾に面する砲台群が築かれ、要塞整理が進められたが、1945 年（昭和 20 年）の終戦により廃止された。

猿島砲台跡は、1881 年（明治 14 年）11 月に起工、1884 年（明治 17 年）6 月に竣工し、観音崎砲台に次いで作られた最初期に属する砲台であり、富津岬・観音崎間の海峡を挟んで置かれた砲台群及び第一～第三海堡（かいほ）と連携し、東京湾内湾への敵艦船の侵入阻止、及び横須賀・長浦両軍港の防御を任務とした。幕末の大輪戸台場等の築造に伴い造成された頂上平坦部（標高約 40m）を利用し、当初、第一・第二・第三砲台の 3 砲台を置いたが、まもなく中央部の砲台を観測所（司令所）に改変、加農砲 2 砲台（27 c m 加農砲 2 門、24 c m 加農砲 4 門を備砲）となった。関東大震災後で被災し、1925 年（大正 14 年）に除籍、跡地は海軍に移管された。島の北側平坦部に第一砲台（1 砲座 1 砲床の 2 砲座）、南側平坦部に第二砲台（1 砲座 1 砲床の 4 砲座）を、いずれも南北方向に配する。砲座の西側背後に高塁道が走り、さらに背後には切り通し状の塁道を設ける。砲台地下には弾薬庫や掩蔽部を設け、砲台間は塁道・隧道で連絡する。横須賀市教育委員会が 2000 年（平成 12 年）以降、継続して発掘調査を実施した結果、第一・第二砲台には、砲座、砲側弾薬庫、棲息掩蔽部等の施設、両砲台を連絡する煉瓦造隧道、隧道内の二層構造の弾薬元庫、第一砲台の塁道（素掘壁）、第二砲台塁道（切石によるブラフ積被覆壁）、電気灯機関舎（木造小屋組、煉瓦造平屋建て）、送電施設、布積の海岸護岸等の施設が残る。砲側弾薬庫や棲息掩蔽部、隧道等の煉瓦建造物の煉瓦はフランス積である。

千代ヶ崎砲台跡は、1837 年（天保 8 年）のモリソン号事件で発砲したことで知られる平根山台場の跡地に位置する。1892 年（明治 25 年）に起工、1895 年（明治 28 年）に竣工した海岸砲台である。榴弾砲砲台（28 c m 榴弾砲 6 門を備砲）と、近接防御砲台（15 c m 臼砲 4 門、機関砲 4 門等を備砲）から構成され、前者は観音崎堡壘群の南方海上と浦賀湾口の海正面防御、後者は上陸した敵兵に対する防御を役割とした。横須賀市教育委員会が平成 23 年に測量・現状調査を実施した。榴弾砲砲台は、南北の直線上に 1 砲座 2 砲床の 3 砲座が配置され、砲座は西側に平行して存在する塁道と地下交通路で連絡し、塁道一砲座間の地下には砲側弾薬庫、掩蔽部、貯水所などの地下施設が付帯する。煉瓦組積法はすべてオランダ積で、隧道内施設の前

面壁と室内、交通路の脚壁では普通煉瓦、露天空間に設けられた施設の前面壁、あるいは露天空間と接する隧道の出入り口には、雨水に対する防水と帯水防止のため焼過煉瓦やきすぎれんがを用いる。

このように、猿島砲台跡と千代ヶ崎砲台跡は、明治時代、東京湾防衛のために西洋の築城技術を導入して、陸軍が造営した東京湾要塞を構成する砲台跡である。築造当初の姿を良好にとどめ、我が国近代の軍事、築城技術の具体的様相を理解するうえで重要であることから、史跡に指定して、その保護をはかるものである。

(『月刊文化財』 2016年(平成28年)3月号より転載)

(2) 答申内容

とうきょうわんようさいあと
東京湾要塞跡

さるしまほうだいあと
猿島砲台跡

ちよがさきほうだいあと
千代ヶ崎砲台跡

所在地 横須賀市猿島1番(猿島砲台跡)

横須賀市西浦賀6丁目17番1ほか(千代ヶ崎砲台跡)

指定面積 66,595.04 m²(猿島砲台跡 51,159.17 m²、千代ヶ崎砲台跡 15,435.87 m²)

概要 東京湾要塞跡は、東に東京湾、西に相模湾を臨む横須賀市の東部、横須賀新港の沖合い1.7kmの猿島に建設された「猿島砲台跡」と、横須賀市東端部の浦賀湾口南岸の丘陵上に建設された「千代ヶ崎砲台跡」で構成される。

猿島・千代ヶ崎両砲台跡は、明治時代、東京湾防衛のため西洋の築城技術を導入して築かれた東京湾要塞を構成する砲台跡である。

猿島砲台跡は、明治14年(1881)11月起工、同17年(1884)6月竣工した、要塞最初期の砲台である。島内には、砲座、弾薬庫等の砲台施設、砲台間を連絡する煉瓦造りの隧道すいどう(トンネル)、隧道内の二層構造の弾薬庫、電気灯機関舎、送電施設、海岸護岸等の施設が良好に残る。

千代ヶ崎砲台跡は、明治25年(1892)起工、同28年(1895)竣工した砲台である。南北の直線上に1砲座2砲床の3砲座が配置され、砲座は西側に平行して存在する塁道るいどうと地下交通路で連絡し、塁道から砲座間の地下には弾薬庫、貯水所などの地下施設が付帯する。

これらの砲台跡は、築造当初の姿を良好にとどめており、我が国近代の軍事、築城技術の具体的様相を理解するうえで重要である。

(3) 指定関連書類

史跡指定通知

指定基準

文化財保護法第 109 条第 1 項

「文部科学大臣は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。」

管理団体指定通知

3. 歴史的背景

(1) 東京湾要塞の歴史

①東京湾要塞の建設

戊辰戦争終結後、明治新政府は版籍奉還、廃藩置県など内政改革を優先していったが、1872年（明治5年）にフランス陸軍中佐マルクリーを招聘、具体的な日本の沿岸防衛策の調査・研究を開始した。以降、マルクリーの後を継いだミュニエー、鳥尾小弥太など日仏軍人によって複数の海防案が提示され、それらは1875年（明治8年）10月4日に黒田久孝・牧野毅・原田一道の連名で陸軍卿山県有朋あてに提出された海岸防御の意見書に集約されていった。意見書では「艦船通航ノ防御」と「都府並ニ製造所其他緊要地ノ防御」が急務とされ、国防のために必須の地域として東京湾、紀淡海峡、下関海峡、豊予海峡、鳴門海峡が挙げられた。東京湾の防御は湾全体の防御地点として富津－観音崎間の海峡、局地的な防御地点として横須賀造船所の存在する横須賀・長浦港と首都前面海域を設定、具体的な砲台建設計画地は観音崎、走水山頂、猿島、富津岬、サラトガ洲（富津砂洲、後の第一海堡建設地）、勝力、波島、箱崎、夏島、浜川町旧砲台、鮫津、八ツ山、品川沖砲台が選定され、後に実現する東京湾要塞の砲台配置の原型が示された。

これらの調査・研究の集約を受けて、1876年（明治9年）4月13日に陸軍卿山県有朋は富津（富津海堡）・観音崎・猿島3砲台の建築費予算額を添えて建築費別途下付を上申したが、新政府の財政難から3砲台の別途下付は認められず、1876年（明治9年）12月に陸軍省予算でまずは観音崎砲台建設予定地の一部が買収され、日本の要塞建設の嚆矢となる砲台建設事業が着手された。1877年（明治10年）に西南戦争が起こったことで砲台建設事業は一時中断したが、1878年（明治11年）7月30日に海岸防御取調委員が設置され砲台建築計画地の現地調査、砲台用地の買収など砲台建設事業が再開された。

②要塞建設期

1880年（明治13年）4月に観音崎－三軒家間の新道開削工事、続いて観音崎第一・第二砲台の建設工事に着手、砲台建設事業は用地買収など計画準備段階から建設実施段階へ移行した。1881年（明治14年）5月までに観音崎第一砲台はほぼ完成したが、同第二砲台建設途中で陸軍省予算が枯渇したため、参謀本部長山県有朋・陸軍卿大山巖連名で再び建設費別途下付が上申され、明治14年度（明治14年7月1日～明治15年6月30日）以降10年間の砲台建設費別途下付が認められた。砲台建設費別途下付の決定を受け、1881年（明治14年）6月に海岸防御取調委員が大幅に増員され、観音崎砲台以外の建設計画諸砲台の現地調査、設計、経費算出など詳細な取調が短い期間で行われた。1881年（明治14年）年10月までに東京湾防御の砲台建設案が議定され、「東京湾口砲台築設要領」が決定された。1881年（明治14年）8月に基礎工事に着手していた富津海堡に続いて、「同築設要領」に基づいて同年9月に観音崎第三砲台、同年11月に猿島砲台、1882年（明治15年）1月に富津元州砲台の建設に着手し、東京湾口部の砲台群の建設が本格化した。以降、1886年（明治19年）に財政難から砲台建設が一時中断されるまでに、観音崎第四・第五・走水砲台の建設が着手された。建設開始初期の1881

年（明治14年）～1882年（明治15年）にかけて建設が開始された砲台は建設途中での設計変更などはあったが、おおむね「同築設要領」に沿った構造で建設された。それに対して、1885年（明治18年）に起工した走水砲台は「同築設要領」では建設予定地は走水山頂（小原台）だったが、砲種に対する立地条件が良くないため標高の低い旗山崎に変更され、「同築設要領」になかった観音崎第五砲台が砲台配置の再検討から増築されるなど、明治10年代後半には「東京湾口砲台築設要領」の修正が行われながら砲台建築が進められた。

1887年（明治20年）に砲台建設事業は再開されたが、砲台に備砲する海岸砲の選定が行われ従来計画に変更の必要性が生じてきた。1888年（明治21年）～1889年（明治22年）にかけて「横須賀軍港防御法要領」、「増設海堡ノ要領」が作成・審議され、横須賀軍港の局地防御のための砲台新設と富津－観音崎間の海域に「第一甲地点ノ海堡（後の第二海堡）」と「第二乙地点ノ海堡（後の第三海堡）」の2海堡の増設が決定された。横須賀軍港防御の砲台群は、1888年（明治21年）～1891年（明治24年）にかけて夏島・笹山・箱崎高・箱崎低・波島・米ヶ浜砲台の建設が順次起工・竣工していった。第二・第三海堡の建設工事はそれぞれ1889年（明治22年）、1892年（明治25年）に割栗石の海中投入による基礎構築工事から始められたが、水深の深さや海底の地盤沈下などでその竣工は大正年間の要塞整理期まで遅延した。

明治20年代前半には湾口部の砲台群に配備する砲種・砲数の選定が行われ、横須賀軍港防御砲台群の建設、海堡の増設が着工されたことで、1890年（明治23年）に従来の防御案を改正・総括した「東京湾口防御案」が策定された。1890年（明治23年）7月17日付で参謀総長熾仁親王から陸軍大臣大山巖に協議された「東京湾口防御案」では、湾口部の砲台群を猿島堡壘団（猿島砲台）、走水堡壘団（走水砲台・小原台第一砲台・小原台第二砲台）、観音崎堡壘団（第一～第五砲台・南門砲台・A地点臨時堡・B地点臨時堡）、海堡団（第一～第三海堡）、援助砲台（千代ヶ崎砲台・富津元州砲台）に整理・編成し、それぞれに防御目的・任務が定められた。海堡はまだ建設中で、千代ヶ崎砲台などいくつかの砲台は未建設であったが、堡壘団に包括される砲台群は要塞建設期に建設された東京湾要塞にきわめて近似した構成が示された。

朝鮮半島をめぐり日清間の緊張が高まる中、1890年（明治23年）「東京湾防御案」に基づいて小原台第一・小原台第二・観音崎南門・千代ヶ崎砲台の建設工事が着手された。小原台第一砲台と小原台第二砲台はともに観音崎砲台及び走水砲台の背後防衛と走水から浦賀にかけて海面防衛の2つの任務を持ち、小原台第一砲台には27cm加農砲4門、15cm臼砲4門、12cm加農砲6門、小原台第二砲台には28cm榴弾砲8門、15cm臼砲4門、12cm加農砲4門の備砲が計画された。小原台北端に小原台第一砲台、東端に小原台第二砲台が建設される予定だったが、小原台第一砲台は地形上の制約から海防砲台と陸防堡壘に分離して設計変更され、海防砲台は走水高砲台、陸防堡壘は小原台堡壘、小原台第二砲台は花立台砲台と改称して1892年（明治25年）に建設工事が着工された。同時に鴨居方面への敵兵の上陸ないしは奇襲に対する近接防御砲台として観音崎南門砲台、観音崎砲台の側防と浦賀湾口の海面防衛を目的とした千代ヶ崎砲台の建設工事も着工され東京湾の防御体制の充実が図られていった。

日清戦争開戦前の1893年（明治26年）には観音崎第三砲台の字三軒家への移転、1890年（明治23年）「東京湾防御案」において「戦時A及Bノ二点ニ臨時堡ヲ築キ観音崎堡壘団近接背後ノ防護ニ充ツ」とされたA点堡壘、B点堡壘の建設計画が検討された。字三軒家に新設される

砲台は廃止される観音崎第三砲台の名称を継承する予定だったが、新設砲台は三軒家砲台と命名、観音崎第四・第五砲台を観音崎第三・第四砲台と数字を繰り上げて改称された。1894年（明治27年）に三軒家砲台、1895年（明治28年）にはA点堡壘とB点堡壘の建設工事が始められ、いずれも日清戦争が終結した1896（明治29年）に竣工した。また、1893年（明治26年）に花立砲台とB点堡壘間の土地に設置が検討されたC点堡壘は、砲台の配置や構成の検討、また経費削減の面からも不要として建設されなかった。1895年（明治28年）に要塞司令部条例が公布され、1880年（明治13年）から建設の始まった東京湾防御の20の砲台は東京湾要塞に包括される砲台群として位置づけられることになった。また、1897年（明治30年）に砲台名の改正が行われ、A点堡壘は大浦堡壘、B点堡壘は腰越堡壘、走水砲台は走水高砲台の名称に対して走水低砲台という砲台名に決定された。

③要塞整理期・復興期

要塞整理期には東京湾の防御線が富津－観音崎線から洲崎－釧崎線、東京内湾から東京湾外湾まで延伸され、三浦半島に西浦・三崎・走水新・千駄ヶ崎・千代ヶ崎、釧崎・城ヶ島砲台の7砲台、房総半島に金谷・洲崎第一・洲崎第二・大房岬砲台の4砲台が新設された。東京外湾に面して新設された千代ヶ崎・城ヶ島・大房岬・洲崎第一砲台は戦艦の砲塔を陸上に移設した砲塔砲台で、それぞれ戦艦鹿島、安芸、鞍馬、生駒の25～30cm加農砲が配備された。東京湾要塞の新たな防衛体制は要塞整理事業に先立って東京湾砲台建築費の残余金で開始され、1917年（大正6年）に西浦砲台、1918年（大正7年）に三崎砲台の建設工事が着工された。1919年（大正8年）に「要塞整理要領及同要領追加」が裁下され、要塞整理事業が本格化した。しかし、1923年（大正12年）9月1日に相模湾を震源地とした関東大震災が発生し、東京湾要塞に大きな被害が出たことによって、東京湾要塞は要塞整理事業と震災復旧事業が平行して進められることになった。

震災直後の1923年（大正12年）11月に「東京湾応急施設要領」が策定され、これに基づいて復旧工事とともに走水新・千駄ヶ崎・金谷砲台の3砲台の新設工事が着工された。翌1924年（大正13年）には「東京湾要塞復旧建設要領書」が策定され復旧工事が本格化し、震災復旧費によって1924年（大正13年）に釧崎・城ヶ島砲塔・洲崎第二砲台、1928年（昭和3年）に大房岬砲塔砲台、1937年（昭和12年）に花立砲台の新設工事が開始された。また、これら震災復旧事業と平行して、1924年（大正13年）に千代ヶ崎砲塔砲台、1928年（昭和3年）に洲崎第一砲塔砲台が要塞整理費によって建設され、1938年（昭和13年）花立砲台の竣工によって東京湾要塞の要塞整理・震災復興期の砲台建設工事が完了した。これら新設砲台の建設と平行して要塞建設期に建設された砲台の整理が行なわれ、1913年（大正2年）から1925年（大正14年）にかけて猿島砲台など13砲台と観音崎砲台の第四砲台以外の砲台、1934年（昭和9年）に走水第一（旧走水低）・走水第三（旧走水高）・三軒家第一（旧27cm加農砲）・三軒家第二（旧12cm加農砲）砲台の4砲台、1943年（昭和18年）には要塞整理期に建設された三崎・金谷・洲崎第二砲台の3砲台が防御営造物から除籍された。

④要塞建設期の東京湾要塞

要塞建設期に東京湾要塞では20の砲台が建設されたが、その建設範囲は富津－観音崎間の

海峡以北の東京内湾に限られていた。航空機出現前の明治年間では防衛対象は艦船と上陸兵だけで、艦船の火砲の射程も長くはなかったため、東京湾の最も狭隘になる富津－観音崎間の海峡を中心に首都防衛が計画された。そのため、要塞建設期の東京湾要塞は東京湾内湾への侵入を阻止する湾口防衛の沿岸砲台群とその背面防御の堡壘砲台・堡壘群、横須賀・長浦両軍港を防衛する沿岸砲台群が建設された。また、建設開始期には品川砲台や八ツ山台場の改築など湾奥に砲台建設の構想があったが、時代の推移による国防方針の変化からそれらが建設されることはなかった。

湾口防御を目的とした砲台群は湾奥に浮ぶ第一・第二・第三海堡と猿島砲台を挟んで、東岸の富津元州砲台、西岸の走水・観音崎地区の砲台群と千代ヶ崎砲台で構成された。第二海堡と第三海堡が広く海峡前方海面を防衛対象区域とし、第一海堡が第二海堡間の海面、走水低・高砲台が第三海堡間の海面を分担し、第一海堡に 28cm 榴弾砲 14 門、19cm 加農砲 1 門、12cm 加農砲 4 門、第二海堡に 27cm 加農砲 6 門、15cm 加農砲 8 門、第三海堡に 15cm 加農砲 4 門、10cm 加農砲 8 門が備砲された。これらの海堡・砲台の西方内湾に位置する猿島砲台は海峡を通過する艦船への防御と海堡群の掩護を分担とし、27cm 加農砲 2 門、24cm 加農砲 4 門が備砲された。走水・観音崎地区には多くの砲台・探照灯など防御営造物が集中し、北西の旗山崎に走水低砲台、その南方の高所に走水高砲台、南東の観音崎に観音崎砲台、西側に接して三軒家砲台の 4 沿岸砲台が配置された。また、夜間警備・防衛のため、走水低砲台の西側の破崎、走水低砲台と三軒家・観音崎砲台の中央に位置する伊勢山崎に探照灯、観音崎砲台の東端に観音崎電灯所、南門電灯所 2 箇所が建設された。西岸の沿岸砲台の中核をなす観音崎砲台は大浦堡壘以東海岸までの丘陵地一帯を占め、第一～第四砲台（旧第三砲台廃止以降の改称砲台名）、南門砲台の複数の砲台と丘陵上の砲台間を連絡する塁道、丘陵間の谷部に設けられた弾薬庫・兵舎などの諸施設、電灯所などから構成された。

観音崎砲台と三軒家砲台は富津－観音崎間の海峡に至るまでの前方海面を防衛することを主要な任務とし、観音崎第一砲台に 24 cm 加農砲 2 門、第二砲台に 24 cm 加農砲 6 門、第三砲台に 28 cm 榴弾砲 4 門、第四砲台に 15 cm 加農砲 4 門、三軒家砲台に 27 cm 加農砲 4 門、12 cm 加農砲 2 門が備砲された。観音崎南門砲台は鴨居方面への上陸に対する近接防御を目的として、12 cm 加農砲 4 門、9 cm 加農砲 4 門が備砲された。第三海堡間の海面防御を分担する走水低・高砲台には、それぞれ 27 cm 加農砲 4 門が備砲された。また、富津元州砲台と千代ヶ崎砲台は援助砲台と位置付けられ、富津元州砲台は第一海堡前面海域を掩護するため 28cm 榴弾砲 6 門、12cm 加農砲 4 門、千代ヶ崎砲台は観音崎砲台の東南方から浦賀湾口に至る海域を掩護するため 28cm 榴弾砲 6 門、15cm 臼砲 4 門、12cm 加農砲 4 門が備砲された。

走水・観音崎地区の沿岸砲台群の後方には、観音崎・走水地区砲台群の背後防御を目的として小原台の北端に小原台堡壘、東端に花立台（堡壘）砲台、観音崎砲台の背面防御を目的として大浦・腰越堡壘が配置された。小原台堡壘に 15 cm 臼砲 4 門、12 cm 加農砲 6 門、花立台砲台に 28 cm 榴弾砲 8 門、15 cm 臼砲 4 門、12 cm 加農砲 4 門、腰越・大浦堡壘にそれぞれ 9 cm 加農砲 2 門が備砲された。

横須賀・長浦軍港を防衛する砲台群は両軍港防御線の左翼端に夏島砲台、右翼端に米ヶ浜砲台を配置し、その間に長浦港西岸の笹山砲台、長浦港と横須賀港を分ける箱崎北端の箱崎低・高砲台、横須賀港西岸の波島砲台の 6 砲台で構成された。夏島砲台は横須賀・長浦両軍港前面

図 13 要塞建設期の走水・観音崎地区の砲台・堡壘群

図 14 要塞建設期の横須賀・長浦港地区の砲台

海域、箱崎高砲台は夏島砲台と勝力崎間の前面海域、米ヶ浜砲台は猿島砲台－勝力崎間の海域を防御対象とし、夏島砲台に 24cm 臼砲 10 門、箱崎高砲台に 28cm 榴弾砲 8 門、米ヶ浜砲台に 28cm 榴弾砲 6 門、24cm 加農砲 2 門が備砲された。笹山砲台は長浦港湾口の近接防衛と夏島・箱崎砲台の側防、波島砲台は横須賀港湾口部の近接防衛と箱崎低・高砲台の側防、箱崎低砲台は笹山・波島砲台と連携して長浦・横須賀港の湾口の近接防衛を分担し、それぞれ 24cm 加農砲 4 門が備砲された。

(2) 猿島砲台跡の歴史

猿島砲台跡は 1881 年（明治 14 年）11 月 5 日に起工して、1884 年（明治 17 年）6 月 30 日に竣工した沿岸砲台で、建設当時は富津海堡（第一海堡）、観音崎砲台と連携して富津－観音崎間の海峡を防御する計画だったが、海堡増設後は海堡の援護と海峡を通過する艦船に対する防御を分担した。観音崎・富津元州砲台とともに日本で最も早く建設された沿岸砲台のため、竣工後に砲台の改良や観測所など諸施設の増改築が行われて砲台としての諸機能が整備されていった。

1876 年（明治 9 年）に作成された「相模国猿島砲台配置之図」に描出されている砲座は実際に建設された猿島砲台と配置が異なることから計画図の一つと考えられるが、この史料から猿島砲台建設以前の地形が把握できる。

1847 年（弘化 4 年）に猿島には 3 箇所の台場が建設されたが、島中央で東面する平坦地が大輪戸台場跡、北端部の平坦地が亥ノ崎台場跡、その東側一段低い平坦地が卯ノ崎台場跡に相当し、大輪戸台場跡の南西に焰硝蔵、南端の海岸に春日神社が存在した区画と九十九折りの登攀道、また島内に諸施設を結ぶ交通路が確認できる。猿島砲台跡の最終的な設計は 1881 年（明治 14 年）10 月までに原案の議定を経て決定され、「東京湾口砲台築設要領」によって具体的な内容が示されたが、その交通路や砲台などの配置は猿島台場建設で造成された地形を下地としていた。猿島砲台跡の主要交通路は埠頭－阪路－露天阪路－第三砲台壘道－隧道－第二砲台壘道に至る路線だが、第三・第二砲台の壘道はそれぞれ大輪戸・亥ノ崎台場跡の西側斜面の走向に準拠して位置が選定され、各々壘道東側の台場跡地を利用して砲座が配置された。第三－第二砲台壘道間は隧道で結ばれ、隧道の西側地下に弾薬元庫、山頂北端に第一砲台が配置された。卯ノ崎台場跡は近接防御砲台の建設予定地とされ、土地の大きな変更はなく交通路として第二砲台壘道南端の小隧道が計画されたと考えられる。

猿島砲台跡の建設は 1881 年（明治 14 年）11 月の起工時に工兵第一方面が担当したが、1882 年（明治 15 年）7 月 26 日に公布された陸軍臨時建築署条例によって組織された陸軍臨時建築署に引き継がれた。1884 年（明治 17 年）6 月 30 日に一応の竣工を見たが、その後 1885 年度（明治 18 年度）～1903 年度（明治 36 年度）にかけて既存施設の不具合による増改築と防御營造物の新設工事が行なわれた。「東京湾砲台建築費支出実費一覧表（明治年間）」によれば、1884 年度（明治 17 年度）までは砲台主体部の建設工事、1885 年度（明治 18 年度）・1886 年度（明治 19 年度）には建設された施設の不具合による増改修工事や災害復旧工事が行なわれた。1891 年度（明治 24 年度）～1894 年度（明治 27 年度）には、1890 年（明治 23 年）に東京湾の湾口部砲台群に配備する砲種・砲数が選定されたことを受けて、砲座の改築と備砲工事、電灯所・電気灯機関舎、第一砲台観測所など防御營造物の新設工事、一部施設の改築工事が行なわれた。

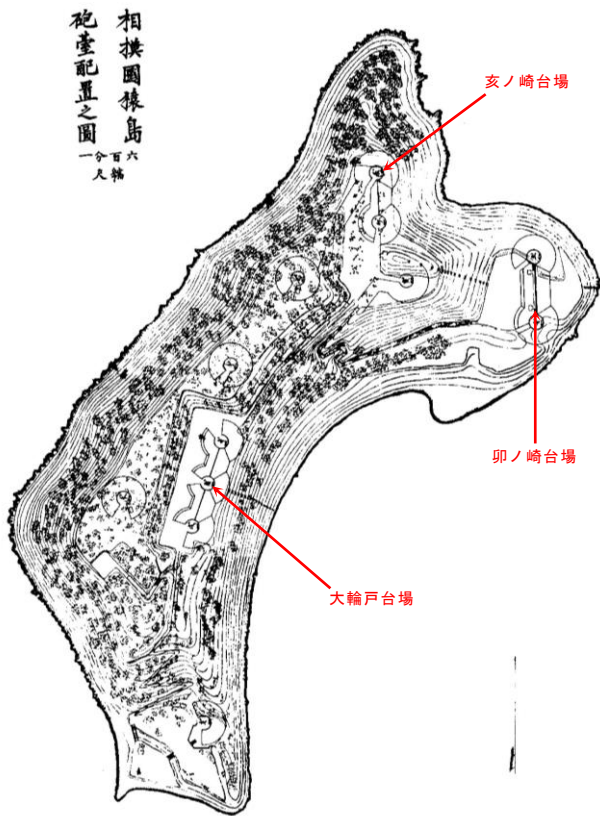


図 15 相模国猿島砲台配置之図 1876 年（明治 9 年）



図 16 東京湾猿島砲台之図 1927 年（昭和 2 年）

1897 年度（明治 30 年度）～1901 年度（明治 34 年度）は、引続き第二砲台観測所などいくつかの防御營造物の増設工事、第三海堡間の電話線・海底電線の敷設工事、弾薬元庫改修工事などが行なわれた。1903 年度（明治 36 年度）は、工事内容の詳細は不明だが、猿島砲台跡の改築工事が行なわれた。この他、1889 年度（明治 22 年度）には定額營繕費によって施設の不具合による増改修工事が行なわれた。

要塞整理期の 1923 年（大正 12 年）9 月 1 日に発生した関東大震災によって電灯所など地上構造物に大きな被害が生じて、1925 年（大正 14 年）7 月に第三海堡などと併せて陸軍の防御營造物から除籍された。その後横須賀軍港防御用地として海軍省へ移管された。1936 年（昭和 11 年）に海軍大臣から横須賀鎮守府司令長官に猿島防空砲台新設の訓令があり、猿島高角砲台の建設が着手された。猿島北東の斜面地を削平して建設地とし、8 cm 単装高角砲が北西に 2 基（A1・A2）、北東に 2 基（A3・A4）が備砲された。また建設工事に伴い、旧猿島砲台第一砲台の砲側弾薬庫奥壁が撤去され、高角砲台に至る交通路に改変された。同時に、射撃指揮装置、照射装置、聴音装置などの設置が指示され、1937 年（昭和 12 年）に九五式陸上用高射装置の生産第一号が据え付けられた。

太平洋戦争末期の 1944 年（昭和 19 年）10 月 14 日に海軍大臣から横須賀鎮守府長官あて、12.7cm 連装高角砲 2 基を基幹とする防空砲台建設の訓令があり、同年 11 月 30 日以降 1945 年（昭和 20 年）7 月 31 日までの間に 8 cm 単装高角砲から 12.7cm 連装高角砲 2 基（B1・B2）に換装された。

- 凡 例
- A 8 cm単装高角砲砲座跡
 - B 12.7 cm連装高角砲砲座跡
 - C 高射機関砲砲座跡
 - D 台座跡
 - E 建物跡
 - F 素掘壕

図 17 猿島高角砲台跡遺構配置図

(3) 千代ヶ崎砲台跡の歴史

千代ヶ崎砲台跡は 1811 年（文化 8 年）に江戸湾で最初に建設された平根山台場跡を中心に周辺の民有地を買収して建設された砲台で、既に 1882 年（明治 15 年）に参謀本部長代理から陸軍卿大山巖にあてた砲台用地買収に係わる照会文書で、砲台としての地理的重要性と基本的な防御対象が認識されていた。東京湾口砲台に備砲する砲種と海堡の増設などの決定を受け、1890 年（明治 23 年）に改定された「東京湾防御案」で千代ヶ崎砲台は富津元州砲台とともに援助砲台に位置づけられ、「千代ヶ崎砲台ハ独立閉鎖堡トシテ観音崎堡壘団ノ援助ニ充テ、其東南ノ側面及ヒ浦賀湾口ノ掩護ニ任シ、且ツ西南陸方面ヨリスル敵軍ノ来侵ニ対シ平作川ノ河

孟ヲ射撃スヘキニ在リ」と規定され、東京湾防御砲台群での任務分担が明文化された。そして、附属する「東京湾口防御兵備表」で、海正面防御用の 28 cm 榴弾砲 6 門、陸正面防御用に 12 cm 加農砲 4 門、15 cm 綫臼砲 4 門、機関砲 4 門の備砲砲種が示された。

「東京湾防御案」に準拠して千代ヶ崎砲台跡の建設は 1892 年（明治 25 年）12 月 6 日に着工されたが、これは日清間の緊張が高まった情勢の中で 1892 年（明治 25 年）末から開始された花立台・観音崎南門・走水高砲台・小原台堡壘建設など一連の東京湾防御砲台増補工事後の最後に着手された砲台新設工事であった。起工直後の 1893 年（明治 26 年）1 月に建築資材の荷揚場として館浦に棧橋を仮設することによる支障の有無が工兵第一方面横須賀支部から浦賀町役場に照会され、砲台建設用地の追加買収が行なわれるなど工事が本格化していった。千代ヶ崎砲台跡の建設は 1895 年（明治 28 年）2 月 5 日に竣工したが、明治 10 年代に建設された猿島砲台跡が弾薬元庫の改修や観測所の新設など大きな増改築が行われたのに対して、竣工時の砲台施設の充実から暴風雨などによる災害復旧を除いて増改築は多くはなかった。

日清戦争開戦後の 1894 年（明治 27 年）12 月 20 日に 28 cm 榴弾砲 4 門、翌 1895 年（明治 28 年）1 月 26 日に 15 cm 綫臼砲 4 門の据付が竣工した。引き続いて備砲工事が進められ、1897 年（明治 30 年）10 月に 28 cm 榴弾砲 2 門が据え付けられて榴弾砲砲台の備砲は完了した。1900 年（明治 33 年）には加農砲の砲床が建設され、同年 12 月 28 日に 12 cm 加農砲 4 門が据え付けられて加農砲砲台の備砲が完了し 1899 年度（明治 32 年度）には 15 cm 綫臼砲砲座の増築が行なわれた。日清戦争終結後も備砲工事は継続され、並行して砲台施設の一部の増改築、付帯施設の新設工事が行なわれた。1896 年（明治 29 年）に「平時ニ在テハ右砲台堡壘ノ軽砲並ニ其附属具等ヲ格納シ戦時ニ在テハ之ヲ守兵棲息所ニ供スル」目的で臨時備砲格納庫 1 棟、1897 年（明治 30 年）に監守衛舎が建設され、1899 年（明治 32 年）には砲台監視設備が整備された。日露間の緊張が高まったことで、1900 年（明治 33 年）～1904 年（明治 37 年）にかけて 12 cm 加農砲砲台建設とともに弾室、観測所など砲台施設の増改築が行なわれた。1900 年（明治 33 年）に沿岸砲台用測遠機の兵器表改正に伴って観測所の改築と鉄製掩体の製作・据付、連鎖揚弾機の設置など砲台施設の増補・改良が進められた。同年から翌 1901 年度（明治 34 年度）までに砲具庫と弾廠、1904 年（明治 37 年）に弾室が建設され要塞建設期の主要な増改築工事は終了した。

1919 年（大正 8 年）に「要塞整理要領及同要領追加」が裁下されて要塞再整理事業が進められたが、千代ヶ崎砲台は 28 cm 榴弾砲砲台として残され、1924 年（大正 13 年）に既存の砲台地から東に延びる尾根上に砲塔砲台が新設された。前年に関東大震災が発生したが、千代ヶ崎砲台は「本砲台ハ被害僅少ニシテ僅カニ軽砲用砲側庫（煉瓦造）ノ中央ニ亀裂ヲ生セシニ過キス」と被害がきわめて軽微であった。1924 年（大正 13 年）1 月に千代ヶ崎砲塔砲台の建設工事が起工したが、砲塔は戦艦鹿島の 30 cm 連装加農砲を陸上に据え付ける工事であった。建設に際しては「至大重量物ノ輸送ヲ要シ候ニ就テハ横須賀鎮守府及同海軍工廠ノ業務ニ支障ナキ範囲ニ於テ浮起重機運貨船並ニ曳船ヲ使用致度候條之カ便宜ヲ與ヘラレ度候也」と陸軍から海軍へ協力要請され、海軍の支援を受けて国内で初めての砲塔砲台建設工事が進められ、翌 1925 年（大正 14 年）6 月 30 日に竣工した。

4. 史跡指定地及び周辺における調査

(1) 猿島砲台跡の調査

①猿島砲台跡の調査履歴

- ・ 1947年（昭和22年）8月3日～
横須賀郷土文化研究室：猿島全島踏査終戦後、研究者による初めての猿島砲台跡・猿島高角砲台跡の踏査。
- ・ 1979年（昭和54年）10月
財団法人観光資源保護財団：観光資源調査
猿島砲台跡の遺構全体測量と個別測量調査。
- ・ 2000年（平成12年）5月15日～9月14日
横須賀市教育委員会：猿島遺跡群第1次調査（A～H地点）
猿島遺跡・猿島洞穴遺跡・猿島台場跡・猿島砲台跡・猿島高角砲台跡、各遺跡の遺構遺存状態の把握を目的とした確認（発掘）調査。
- ・ 2002年（平成14年）12月24日～2003年（平成15年）2月24日
横須賀市教育委員会：猿島遺跡群第2次調査（I地点）
第二砲台塁道の明治期・昭和前期の道路面、第二砲台第三砲座前面の被覆壁崩落跡の確認（発掘）調査。
- ・ 2003年（平成15年）5月21日～10月10日
横須賀市教育委員会：猿島遺跡群第3次調査（J～M・C地点）
第1次調査未調査区の確認（発掘）調査と電気灯機関舎の建築物実測調査
- ・ 2006年（平成18年）1月30日～2月7日
横須賀市教育委員会：猿島遺跡群第4次調査（J地点）
南側海浜部に建設された土地区画の石積擁壁の確認（発掘）調査。
- ・ 2012年（平成24年）3月22日～3月30日
横須賀市教育委員会：猿島遺跡群第5次調査（N地点）
未調査だった隧道南側出入口に近接する貯水所の確認（発掘）調査。

②猿島砲台跡に関する主な刊行図書

- ・ 岩崎義朗・赤星直忠ほか 「猿島」 『横須賀市史 No. 7』 横須賀郷土文化研究室 1952年（昭和27年）
- ・ 赤星直忠 「三浦半島城郭史（下）」 『横須賀市史 No. 9』 横須賀市教育委員会 1955年（昭和30年）7月
- ・ 藤森照信ほか 「猿島一現況調査に関する報告」 『観光資源調査報告 VOL. 8』 財団法人観光資源保護財団 1980年（昭和55年）3月
- ・ 野内秀明ほか 『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第9集 猿島遺跡群』 横須賀市教育委員会 2002年（平成14年）3月
- ・ 野内秀明ほか 『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第11集 猿島遺跡群2』 横須賀市教育委員会 2004年（平成16年）3月

- ・ 野内秀明ほか 『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第 12 集 猿島遺跡群 3』 横須賀市教育委員会 2005 年（平成 17 年）3 月
- ・ 野内秀明 『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第 13 集 猿島遺跡群 4』 横須賀市教育委員会 2007 年（平成 19 年）3 月
- ・ 藤森照信・清水慶一ほか 『新横須賀市史 別編文化遺産』 横須賀市 2009 年（平成 21 年）6 月
- ・ 矢島國雄・野内秀明ほか 『新横須賀市史 別編考古』 横須賀市 2010 年（平成 22 年）3 月
- ・ 原剛・高村聡史ほか 『新横須賀市史 別編軍事』 横須賀市 2012 年（平成 24 年）12 月
- ・ 野内秀明 『横須賀市文化財調査報告書第 51 集 東京湾要塞跡 猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡』横須賀市教育委員会 2014 年（平成 26 年）3 月

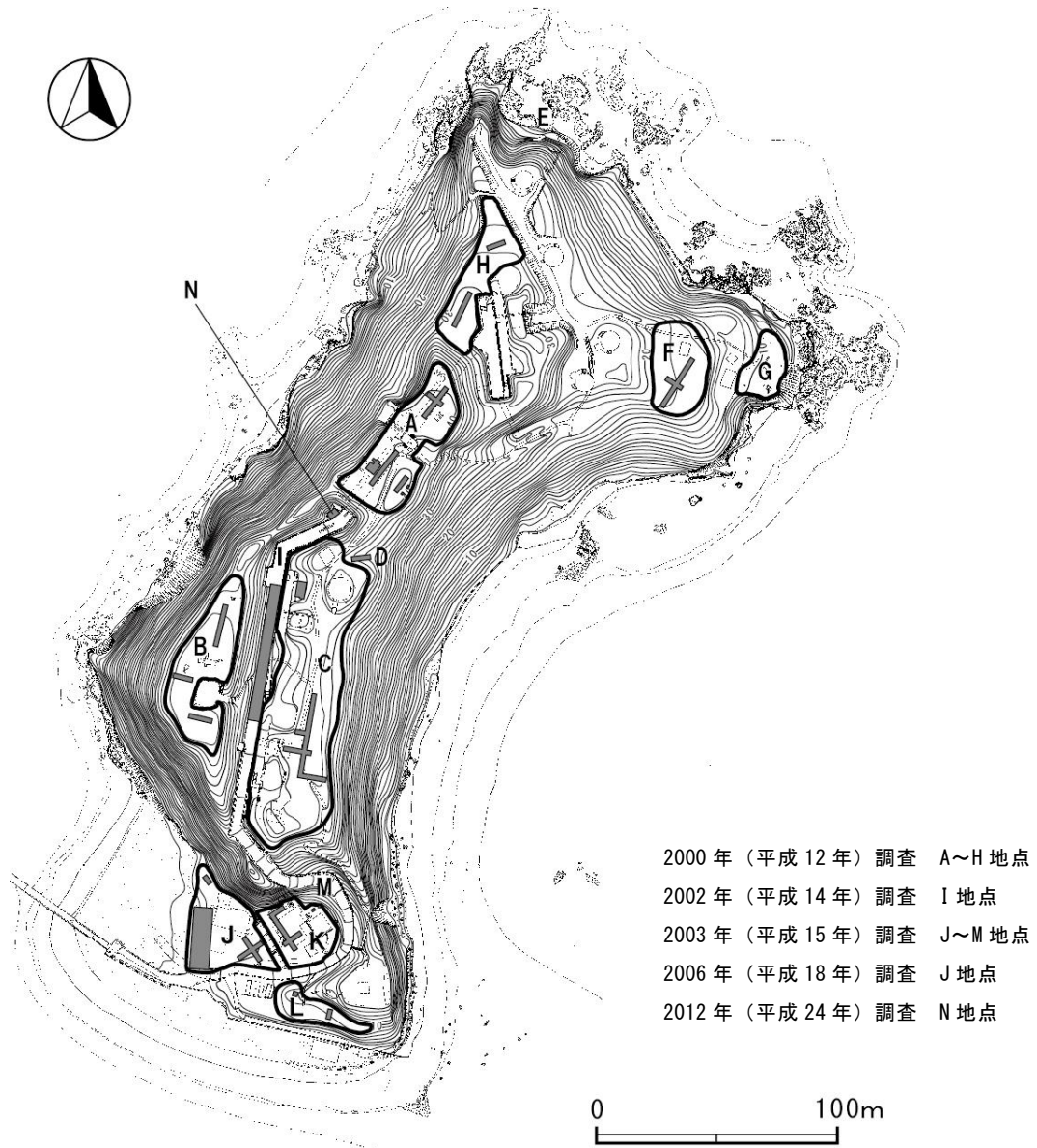


図 18 猿島砲台跡発掘調査箇所位置図

(2) 千代ヶ崎砲台跡の調査

①千代ヶ崎砲台跡の調査履歴

- ・ 1946年（昭和21年）4月 赤星直忠：千代ヶ崎砲台踏査
- ・ 1952年（昭和27年）3月 赤星直忠：千代ヶ崎砲台跡再踏査
- ・ 2011年（平成23年）9月12日～9月28日
横須賀市教育委員会：千代ヶ崎砲台跡測量調査

②千代ヶ崎砲台跡に関する主な刊行図書

- ・ 赤星直忠 「三浦半島城郭史（下）」 『横須賀市史 No. 9』 横須賀市教育委員 1955年（昭和30年）7月
- ・ 浄法寺朝美 『日本築城史—近代の沿岸築城と要塞—』 原書房 1971年（昭和46年）12月
- ・ 野内秀明 『横須賀市文化財調査報告書第51集東京湾要塞跡 猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡』横須賀市教育委員会 2014年（平成26年）3月

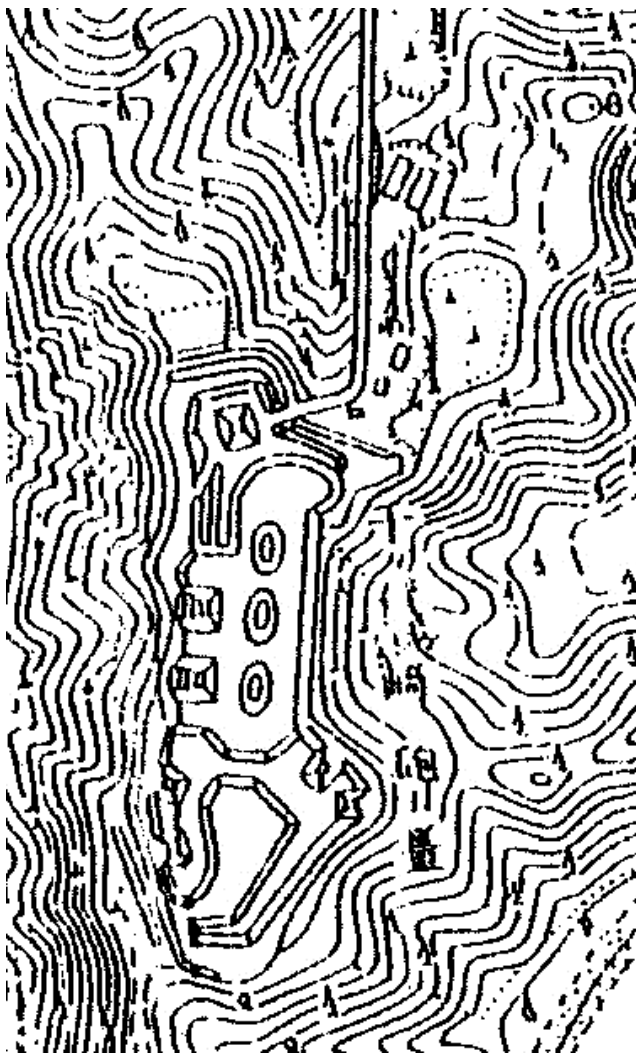


図19 明治36年の千代ヶ崎砲台跡
(出典：東京湾要塞近傍十号)

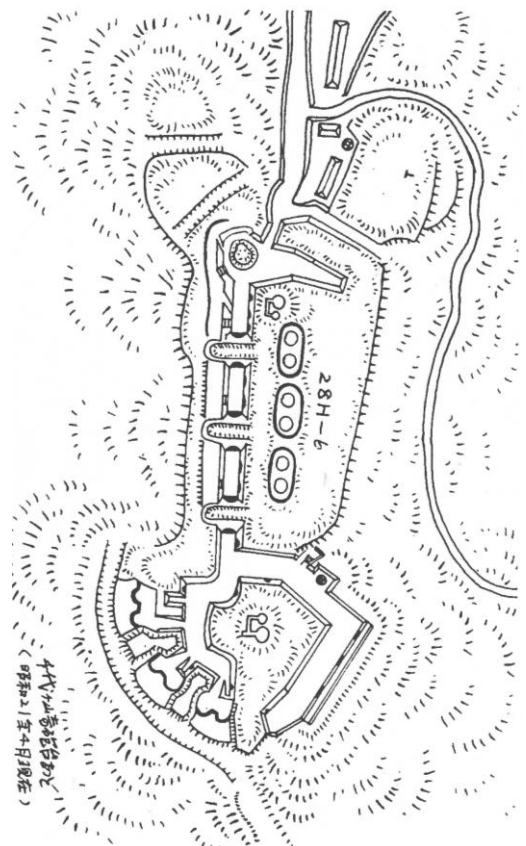


図20 千代ヶ崎砲台跡 昭和20年代踏査時の図面
(出典：赤星直忠「三浦半島城郭史（下）」『横須賀市史 No. 9』)

5. 遺構の状況

猿島砲台跡、千代ヶ崎砲台跡の遺構の状況の詳細については、カルテを作成して抄録に掲載した。概要については以下のとおりである。

(1) 猿島砲台跡遺構の現況

猿島砲台跡を構成する遺構は図 21、図 22 の通りである。

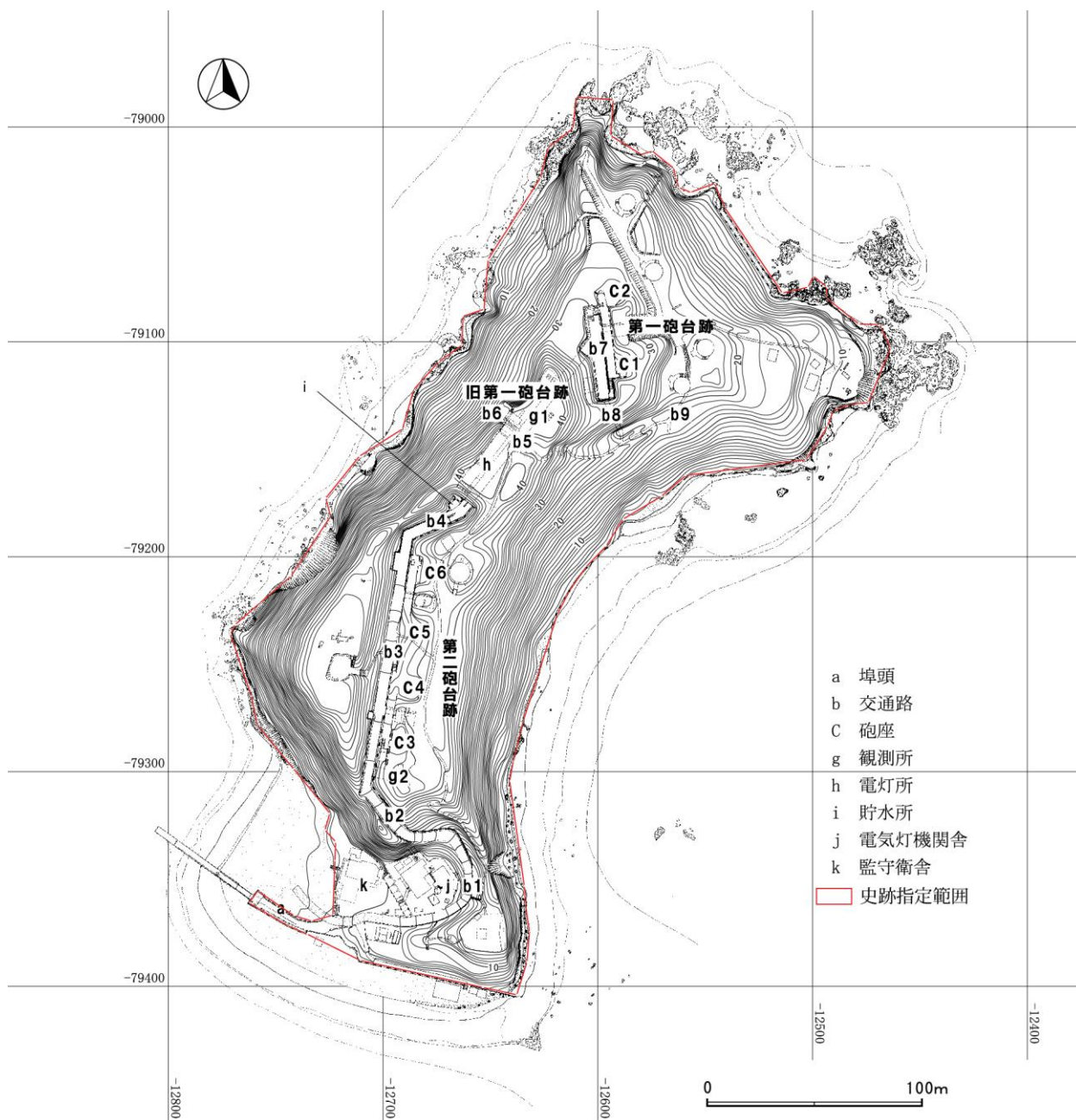


図 21 猿島砲台跡遺構配置図（地上構造物）

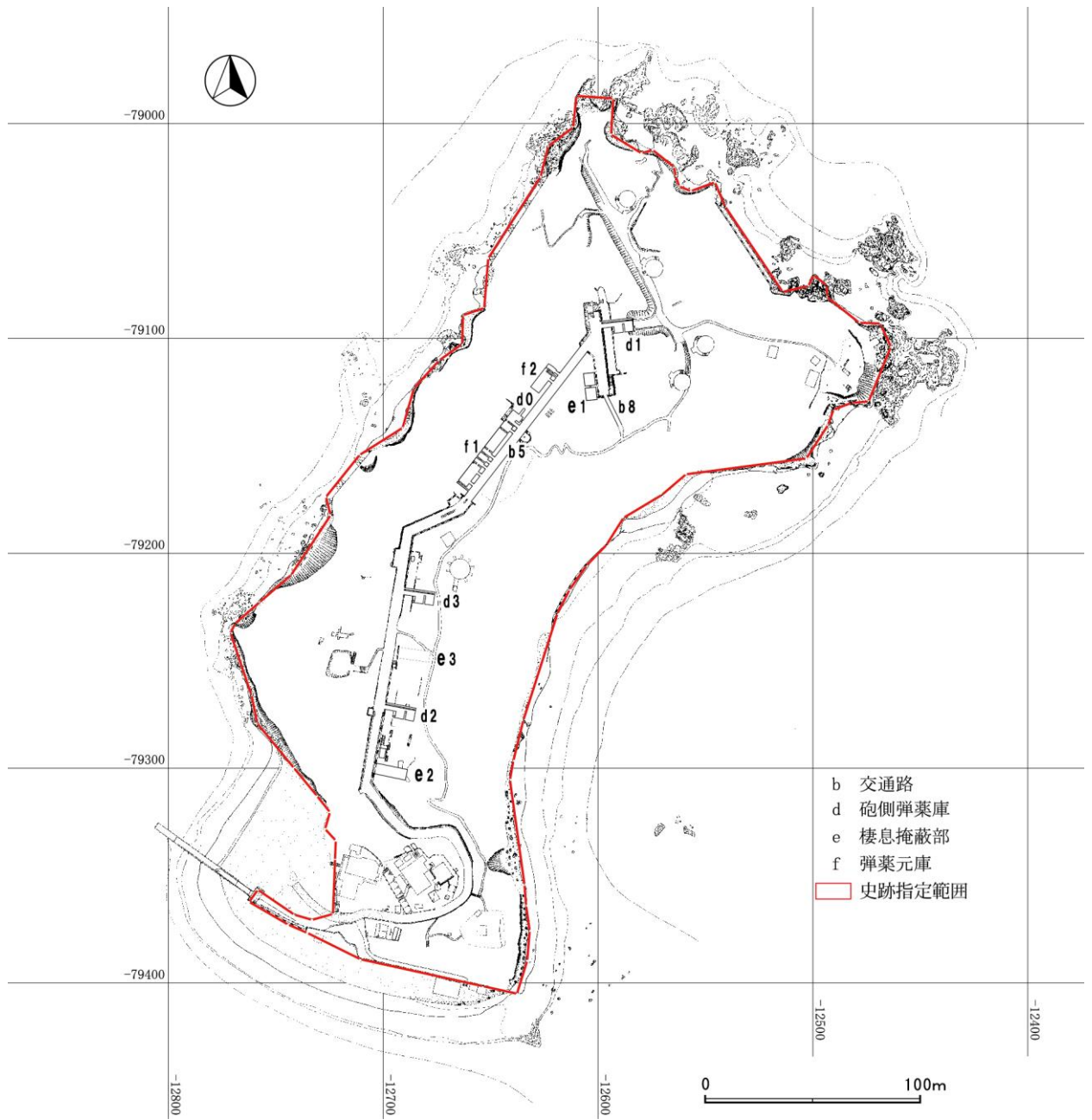


図 22 猿島砲台跡遺構配置図（地下構造物）

① 埠頭（付帯階段）（a）

階段及び石積みが残存している。埠頭上には海水浴客の監視所等が設置される。

② 阪路（b1）、切通し（b2）、第二塁道（b3・b4）

阪路は左右が素掘りの切通し状を呈している。崩落防止のため、公園部局が崩落対策ネットを設置している。

第二塁道は切石凝灰質礫岩によるブラフ積み被覆壁が続いており、路面には公園整備時に木製デッキの園路が敷設されている。

被覆壁は入口付近の第二砲台第一掩蔽部（e2）の対面部分等で、壁面の上部には樹木藻類が生い茂っている。

③砲座（c1～c6）

猿島砲台跡の砲座は、現在すべて埋没している。猿島砲台跡の砲座は、観音崎砲台跡と類似の構造を持つと考えられている。明治時代の砲座に近接して昭和の高角砲の砲座が建設されている。

④砲側弾薬庫（d1～d3）及び棲息掩蔽部（e1～e3）

遺構はフランス積みの煉瓦により構築されており、入り口部分のアーチにはキーストーンが使用されている。公園整備の際、入口扉部分にはステンレス製の金網状扉が、窓にはベニヤが貼られた。

⑤隧道（b5）及び隧道西側弾薬元庫（f1、f2）・旧第一砲台砲側弾薬庫（d0）

危険性があるため、内部に入れないよう出入口がベニヤでふさがれている。

⑥電気灯機関舎（j）

現在は新しい発電機が置かれ稼働しており、後世の改変はあるが、状態はおおむね良好である。

⑦護岸（m）

消波工を伴う安山岩切石による布積護岸残存部と崩落部があり、東側崩落部では、基底部及び消波工が残っている地区がある。

猿島砲台跡遺構の現況写真



a 埠頭（付帯階段）



b 2 阪路



b 3 第二砲台墨道



b 5 隧道（南側から）



c 2 第一砲台第二砲座



d 0 隧道から2階への階段



d 0 旧第一砲台 砲側弾薬庫



d 1 第一砲台 砲側弾薬庫（北側から）
※昭和11年に交通路に改変

猿島砲台跡遺構の現況写真



d 2 第二砲台 第一砲側弾薬庫



d 3 第二砲台 第二砲側弾薬庫



e 1 第一砲台 棲息掩蔽部、b 7 墨道



e 2 第二砲台 第一棲息掩蔽部



f 1 南側弾薬元庫 南建屋1階



f 1 南側弾薬元庫 北建屋2階



j 電気灯機関舎



m 海岸護岸

(2) 千代ヶ崎砲台跡遺構の現況

千代ヶ崎砲台跡を構成する遺構は図23～図24のとおりである。

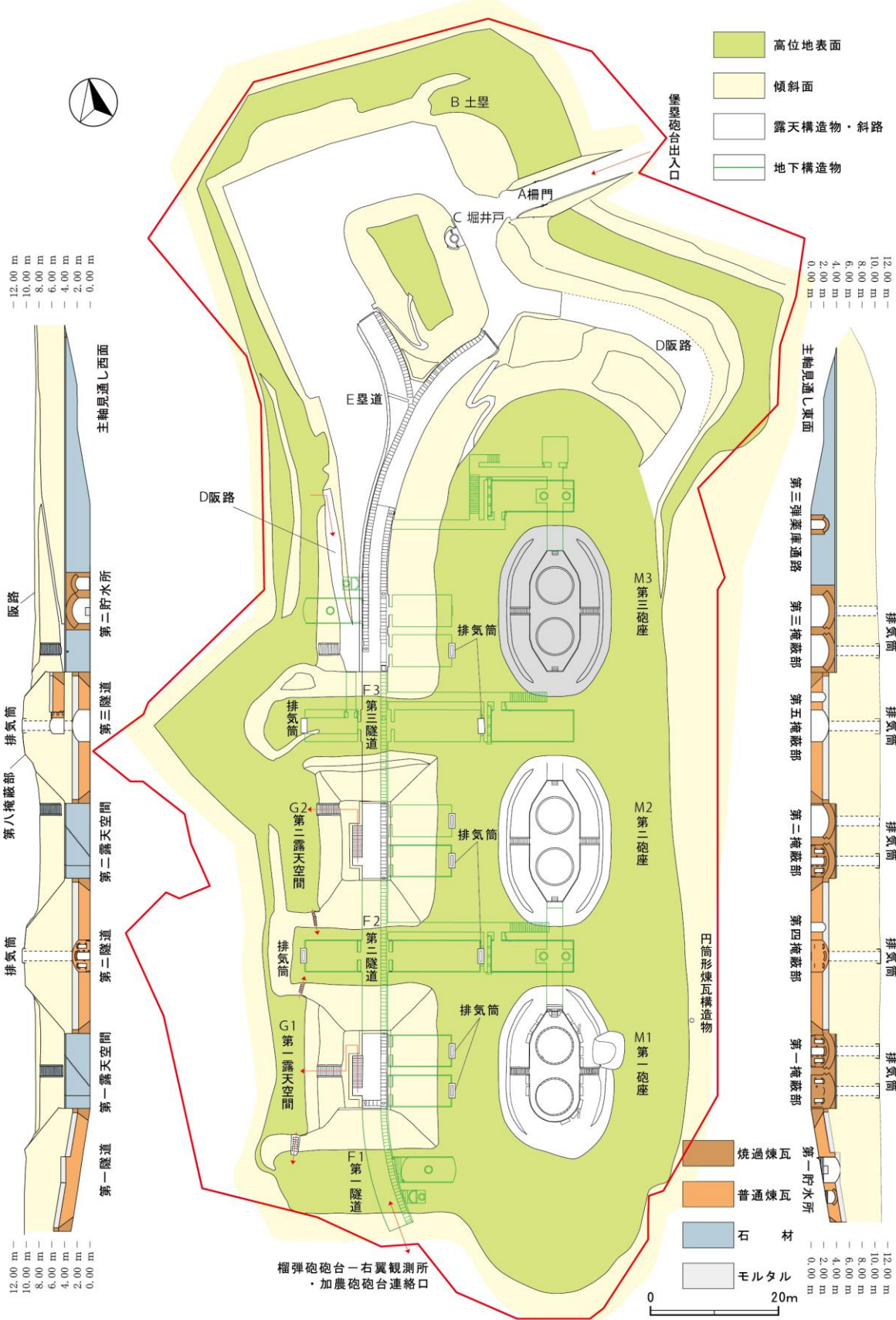


図23 千代ヶ崎砲台跡遺構配置図(地上構造物)

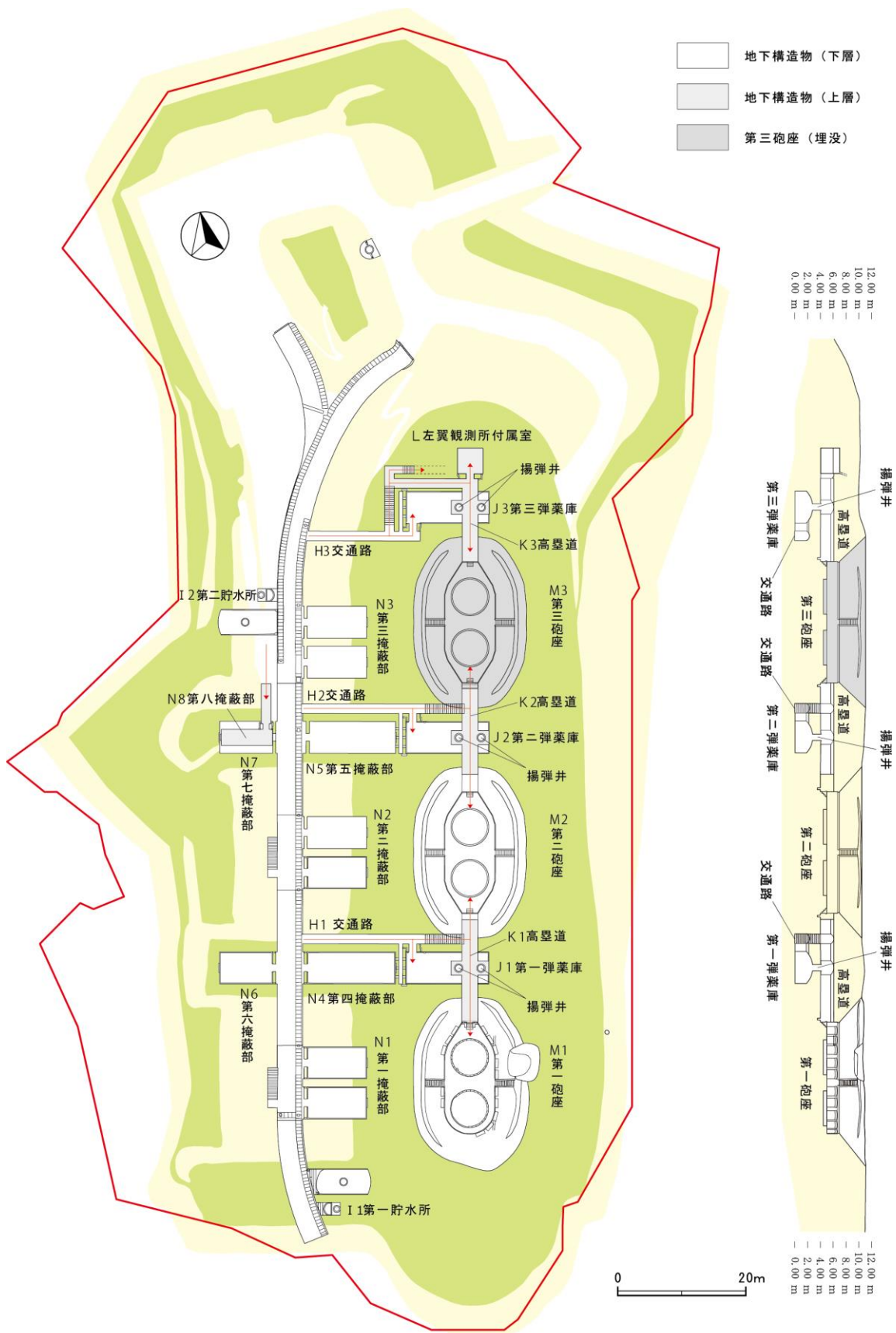


図 24 千代ヶ崎砲台跡遺構配置図 (地下構造物)

①土 壘 (B)

北側は海上自衛隊千代ヶ崎送信所として利用されていた時に、駐車場建設等にもなって、内側が削られたことが推定できる。また阪路により土壘が切られたと考えられる箇所も存在する。

②交通路 (H2～H3)、弾薬庫 (J1～J3)、掩蔽部 (N1～N8)

掩蔽部のうち、左右に並ぶ第二掩蔽部の左室、第三掩蔽部、第七掩蔽部、第八掩蔽部は、海上自衛隊の送信所であった時代に改変されている。

③高壘道 (K1～K3)

第一砲座－第二砲座間高壘道は、第一砲座への出入り口は開口しているが、第二砲座への出入り口はコンクリートにより閉塞されている。第二砲座－第三砲座間高壘道は、第二砲座側、第三砲座側出入り口共に閉塞されている。第三砲座高壘道は第二次大戦後に埋められた第三砲座から土砂が流入している状態である。

④左翼観測所、左翼観測所附属室 (L)

左翼観測所は第二次大戦後間もなく取り壊された。観測所基礎は埋没していると推測される。左翼観測所の瓦礫と推測される煉瓦片と土砂が、観測所への登り口である交通路へ堆積している。

左翼観測所附属室は残存しているが、床に流入した土砂が堆積している。

⑤砲 座 (M1～M3)

3基の砲座のうち、第二砲座は2013年(平成25年)に砲座を埋める覆土が除去されたが、第三砲座は埋没したままで、遺存状況と構造については確認されていない。

⑥その他 (F2～F3、I1～I2等)

その他の隧道や貯水所等の施設の状態はおおむね良好である。

⑦史跡指定地外の砲台施設

史跡指定地隣接地には、右翼観測所跡、近接防御砲台跡が存在するが、民有地にあるため、調査が行われておらず内容は不明である。これらの施設は千代ヶ崎砲台跡を構成する重要施設と位置付けられる。また、付帯施設である監守衛舎跡の推定地や軍道も史跡指定地外に存在する。史跡指定地への導入路となる軍道は、当時の路面上に舗装が施され、市道として現在も利用されている。千代ヶ崎砲台跡が立地する丘陵へ向かう軍道は凝灰岩切石によるブラフ積が残存している。

千代ヶ崎砲台跡遺構の現況写真



A 柵門、B 土塁（史跡側より）



C 掘井戸



E 塁道 合流地点



G 2 第二露天空間、F 3 第三隧道



H 3 交通路出入口



J 3 第三砲側弾薬庫



K 1 第一、第二砲座間高塁道



K 2 第二、第三砲座間高塁道

千代ヶ崎砲台跡遺構の現況写真



K 3 第三砲座高塁道



L 左翼観測所附属室



M 1 第一砲座



M 2 第二砲座



N 1 第一掩蔽部



N 4 第四掩蔽部



N 6 第六掩蔽部



I 1 第一貯水所

6. 関連遺跡・文化財の状況

(1) 史跡地内及び史跡周辺の関連遺跡

① 猿島砲台跡

猿島には、明治時代に建設、増設・整備されていった猿島砲台跡以外に、縄文時代早期・中期後半～後期前半にかけて生活跡が残る猿島遺跡、弥生時代中期～古墳時代後期・近世に海食洞穴内に貝塚が残された猿島洞穴遺跡、江戸時代後期に海防のために建設された猿島台場跡、昭和時代前期に防空砲台として建設された猿島高角砲台跡など複数の性格の異なった遺跡が存在している。

これらのうち、猿島台場跡は猿島砲台跡の前身となる施設で猿島高角砲台跡は 1925 年（大正 14 年）に、猿島砲台跡が陸軍の防御造営物から除籍され、海軍省に移管された後に建設されたものである。

①-1 猿島台場跡

猿島台場跡は、1847 年（弘化 4 年）8 月に建設された台場で、大輪戸台場と亥ノ崎台場と島の北東端部の一段低い場所にある卯ノ崎台場の計 3 箇所（箇所）の台場、付帯施設としての焰硝蔵などから構成されていた。

猿島砲台が建設された際には、猿島砲台跡第一砲台（旧第二砲台）は島北端の亥ノ崎台場跡、猿島第二砲台（旧第三砲台）は島の中央部東側の大輪戸台場跡、猿島砲台跡旧第一砲台は亥ノ崎台場～大輪戸台場間の山頂を改変・拡張して建設された。各砲台間を連絡する交通路もおおむね各台場の改変された地形を導線とした。卯ノ崎台場は有事の際に近接防御砲台建設予定地として現況のまま残され、第一砲台塁道からの交通路として隧道だけが建設された。

このように、台場にかかわる施設は、猿島砲台跡が台場跡地を利用して建設されたことから、多くの遺構が消失している。しかしながら、2000 年（平成 12 年）に実施した確認調査で、大輪戸台場に連絡する道路状遺構と敷石遺構の一部が検出されていることから、今後詳細な調査の実施により台場関連遺構の新たな発見が期待される。

①-2 猿島高角砲台跡

猿島高角砲台跡は、1936 年（昭和 11 年）に海軍大臣から横須賀鎮守府司令長官に猿島防空砲台新設の訓令があり、建設が着手された。猿島北東の斜面地を削平して建設地とし、8 cm 単装高角砲が北西に 2 基（A 1・A 2）、北東に 2 基（A 3・A 4）が備砲された。また建設工事に伴い、旧猿島砲台跡第一砲台の砲側弾薬庫奥壁が撤去され、高角砲台に至る交通路に改変された。同時に、射撃指揮装置、照射装置、聴音装置などの設置が指示され、1937 年（昭和 12 年）に九五式陸上用高射装置の生産第 1 号が据え付けられた。

太平洋戦争末期の 1944 年（昭和 19 年）10 月 14 日に海軍大臣から横須賀鎮守府長官あて、12.7cm 連装高角砲 2 基を基幹とする防空砲台建設の訓令があり、同年 11 月 30 日以降 1945 年（昭和 20 年）7 月 31 日までの間に 8 cm 単装高角砲から 12.7cm 高角砲 2 基（B1・B2）に換装された。2000 年度（平成 12 年度）の確認調査では高射機関砲砲座（C）が検出されているが、他に存在する台座（D 1・D 2）・建物跡（E）・素堀壕（F）の詳細は不明である。

図 25 猿島台場・高角砲台跡遺構配置図

②千代ヶ崎砲台跡

千代ヶ崎砲台跡は立地する平根山上に縄文時代早期の平根山遺跡が存在しており、江戸時代後期になると平根山台場、続いて近接地に千代ヶ崎台場が建設された。明治時代に入ると平根山台場跡を買収し、千代ヶ崎砲台を建設、大正時代になると隣接地に砲塔砲台を建設した。このように、千代ヶ崎から燈明崎に至る海岸、背後の丘陵地帯は江戸時代後期から近代にかけて江戸湾及び東京湾の防御の拠点として多くの海防施設が建設されてきた土地である。

②-1 平根山台場跡

1811年（文化8年）に会津藩が最初に江戸湾防備の台場を建設したうちの1つで、平根山に設置された。1821年（文政4年）からは浦賀奉行所が直轄し、アメリカの商船モリソン号への砲撃で知られている。

②-2 千代ヶ崎台場跡

1848年（嘉永元年）浦賀奉行所が担当していた平根山台場跡の廃止を決定、代わりに千代ヶ崎台場を新設する。その後彦根藩に引き渡されることとなり、長州、熊本、佐倉藩と引き継がれ、1863年（文久3年）をもって役目を終えている。

②-3 燈明堂跡及び周辺地域

燈明堂跡及び周辺地域は、江戸時代に浦賀港の入口、燈明崎に建っていた燈明堂の跡地である。燈明堂は石垣を土台として、上に二階建ての建物があった。階下は番人小屋で階上は四方を紙張障子とその上に金網をめぐらしてあった。

その中に直径36.4cm、深さ12.2cmの銅製の灯明皿が置かれ、一晩に灯心百筋と菜種油一升（1.8リットル）が灯され、その光は四海里（7.2km）に達したという。当初は勘定奉行の所管であったが、後に浦賀奉行に所管替えとなり、明治になり神奈川県府の所管となった。経費は1690年（元禄3年）までは徳川幕府が賄っていたが、1691年（元禄4年）からは東浦賀の干鯛問屋が一切を負担するようになった。

1872年（明治5年）4月に廃止するまで、約220年間にわたり一日も休まず夜間の海上交通の守り役として活躍した。我が国の灯台史上、極めて貴重なものである。

建物は明治20年代に崩壊し、高さ約1.8m、幅3.6m四方に組み合わされた「切り込み接ぎ石垣」だけが残された。

②-4 千代ヶ崎砲塔砲台跡

千代ヶ崎砲台跡が立地する丘陵上から東に延びる尾根の先端には、1925年（大正14年）に軍艦鹿島の砲塔1基を陸上砲台に転用・改造して建設された千代ヶ崎砲塔砲台跡が存在する。



図 26 千代ヶ崎砲台跡関連遺構配置図

③他の東京湾要塞跡の遺跡

東京湾要塞跡は日本で最初に建設された要塞で、明治 10 年代に建設された唯一の要塞である。東京湾要塞に包括される砲台は、明治年間に建設された東京湾内湾の湾口部に位置する砲台群と、大正～昭和年間に建設された東京湾外湾と相模湾に面した砲台群に大別される。明治年間に建設された砲台は富津－観音崎間の海峡と横須賀・長浦両軍港を防御する砲台群に細別される。前者の建設時期は明治 10 年代と明治 20 年代後半の 2 つの時期に別れ、後者は 1888 年（明治 21 年）に策定された「横須賀軍港防禦法要領」に基づいて明治 20 年代前半に建設された。明治 30 年代以降は既存の諸砲台に必要な防禦營造物が増設され、東京湾要塞の機能の充実が図られた。大正～昭和年間には艦船火砲の長射程化、航空機の出現など軍事技術の進歩などから、既存砲台の廃止と改築、新砲台建設など要塞整理が進められたが、東京湾要塞跡は 1923 年（大正 12）年に発生した関東大震災によって被災したため、震災復興と要塞整理事業が並行して進められた。

現在、これらの砲台跡は 32 箇所の存在が確認されている。そのうち多くは、例えば神奈川県立観音崎公園内に所在する砲台群（観音崎第一～第四・旧第三砲台跡・三軒家砲台跡・大浦堡壘跡・腰越堡壘跡）、横須賀市有地にある走水低砲台跡・米ヶ浜砲台跡、防衛大学校内にある砲台跡群（走水高砲台跡・花立台砲台跡・小原台堡壘跡・小原台演習砲台）、在日米海軍横須賀基地内にある砲台跡群（波島砲台跡・箱崎高砲台跡・箱崎低砲台跡）、国史跡夏島貝塚の指定地内にある夏島砲台跡など、公有地に所在している。県立観音崎公園内にある砲台群や走水低砲台跡は、公園として整備・公開されている。

表 4 東京湾要塞の砲台起工・竣工・除籍年/備砲砲種・砲数一覧表

No	砲台名	建設期間			要塞建設期			要塞整理期・震災復旧期			備砲砲種・砲数
		起工年	竣工年	除籍年	起工年	竣工年	除籍年	起工年	竣工年	除籍年	
1	富津元州砲台	M15.01.08	M17.06.28	T04.08.*1							28榴6/12加4
2	第一海堡	M14.08.01	M23.12.20		(T13.10.01)	(S03.11.30)	終戦				28榴14/12加4/19加1
3	第二海堡	M22.07.	T03.06.				終戦				27加6/15加8
4	第三海堡	M25.08.	T10.03.	T14.07.							15加4/10加8
5	猿島砲台	M14.11.05	M17.06.30	T14.07.							27加2/24加4
6	観音崎砲台										
	第一砲台	M13.06.05	M17.06.27	T04.08.							24加2
	第二砲台	M13.05.26	M17.06.27	T14.07.							24加6
	旧第三砲台	M14.09.	M17.06.	T14.07.							28榴2
	第三(旧四)砲台	M15.08.09	M17.06.27	T14.07.							28榴4
第四(旧五)砲台	M19.11.01	M20.05.23		(T13.06.20)	(T13.07.31)	終戦				15加4(改造前24臼4)	
南門砲台	M25.11.01	M26.08.31	T14.07.	(T13.07.05)	(T13.07.31)					12速加4/9速加4	
7	走水低砲台	M18.04.01	M19.04.25		(T13.05.28)	(T13.07.20)	S09.08.				27加4
8	走水高砲台	M25.11.21	M27.02.20				S09.08.				27加4
9	三軒家砲台	M27.12.15	M29.12.20								27加4
	27加砲台 砲台 12速加砲台	M28.04.09	M29.03.31		(T13.05.28)	(T13.07.30)	S09.08.				12速加2
10	千代ヶ崎砲台	M25.12.06	M28.02.05		(T13.06.08)	(T13.07.31)	終戦				28榴6/15臼4/12加4
11	花立台砲台	M25.10.01	M27.12.15	T14.07.							28榴8/15臼4/12速加4
12	小原台堡壘	M25.12.01	M27.09.30	T02.07.							15臼4/12加6
13	腰越堡壘	M28.05.01	M29.03.31	T14.07.							9加2
14	大浦堡壘	M28.05.01	M29.07.31	T14.07.							9加2
15	夏島砲台	M21.08.14	M22.11.14	T04.08.							24臼10
16	笹山砲台	M21.08.15	M22.08.20	T04.08.							24加4
17	箱崎低砲台	M22.06.15	M23.08.14	T04.08.							24加4
18	箱崎高砲台	M21.09.02	M22.09.30	T04.08.							28榴8
19	波島砲台	M22.07.12	M23.07.05	T04.08.							24加2
20	米ヶ浜砲台	M23.04.21	M24.05.31	T12.12.							28榴6
	24加砲台	M24.03.11	M24.10.20								24加2
21	西浦砲台				T06.12.	T09.08.	T14.07.				30榴4(備砲なし)
22	三崎砲台				T07.12.	T10.08.	S18.03.				30榴4
23	走水新(第二)砲台				T12.12.	T13.03.	終戦				10速加4
24	千駄ヶ崎砲台				T12.12.	T13.03.	終戦				10速加4
25	金谷砲台				T12.12.	T13.03.	S18.03.				15加4
26	千代ヶ崎砲塔砲台				T13.01	T14.06.	終戦				30加2門砲塔1(鹿島)
27	鉦崎砲台				T13.10.11	S02.06.10	終戦				15加2門砲塔2
28	城ヶ島砲塔砲台				T13.10.12	S04.03.16	終戦				25加2門砲塔2(安芸)
29	洲崎第二砲台				T13.10.08	S02.03.21	S18.03.				30榴4
30	大房岬砲塔砲台				S03.01.04	S07.10.25	終戦				20加2門砲塔2(鞍馬)
31	洲崎第一砲塔砲台				S03.09	S07.10.	終戦				30加2門砲塔1(生駒)
32	花立砲台				S12.10.10	S13.03.31	終戦				15加2門

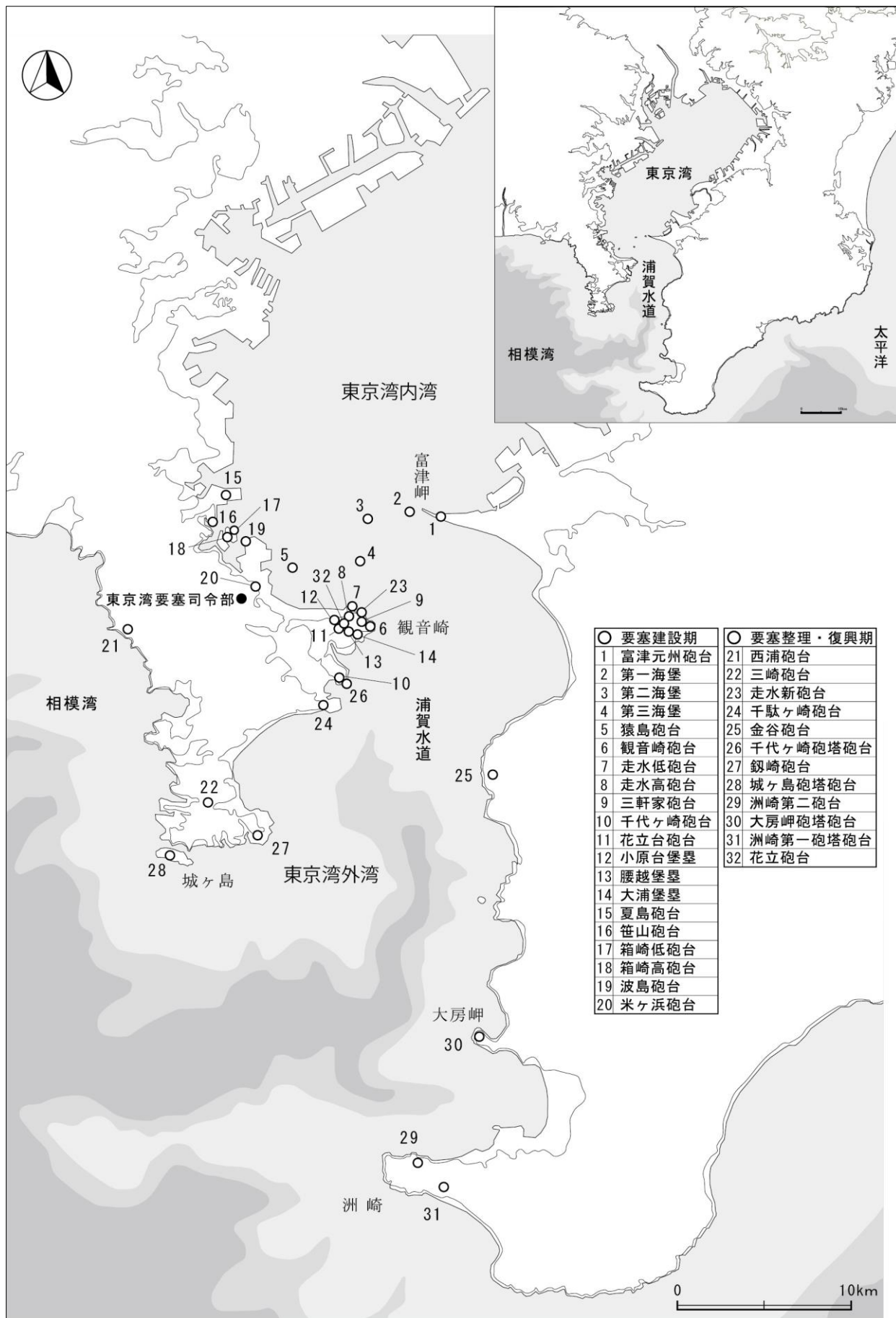


図 27 東京湾要塞を構成する砲台の分布

他の東京湾要塞跡を構成する砲台跡の写真



観音崎砲台跡第2砲台・加農砲砲座



観音崎砲台跡第2砲台・砲側弾薬庫



走水低砲台跡・加農砲砲座



走水低砲台跡・砲側弾薬庫



夏島砲台跡・地下施設



夏島砲台跡・右翼観測所通路



第三海堡構造物・観測所



第三海堡構造物・兵舎

7. 公有化状況

猿島砲台跡、千代ヶ崎砲台跡共に、史跡指定地内はすでに公有地である。

8. 土地利用状況

猿島砲台跡は都市公園となっており、砲台跡の遺構が分布する島の頂上部の平坦地に見学用の園路等が設置され、周遊できるようになっている。海岸から頂上部へ至る登り口に売店、トイレ、休憩施設が配置されている。周縁は急峻な海食崖が発達し、頂上部と周縁部の間の斜面部は森林となっている。

千代ヶ崎砲台跡は地目上、山林と畑、一部が公衆用道路になっているが、現在は海上自衛隊千代ヶ崎送信所時代に駐車場となっていたアスファルト舗装の残置部分や、煉瓦構造等の砲台遺構の部分を除き、草地となっており、施設としては使用されていない。

9. 活用状況

(1) 猿島砲台跡

猿島砲台跡が所在する猿島は都市公園として整備公開されており、年間 10 万人以上が訪れる観光地となっている。1995 年度（平成 7 年度）の開園以来、観光客は年々増加している。

一部砲台遺構の内部見学については、管理上の観点から常時公開は行わず、ガイドの案内により見学可能なシステムとしている。なお、外観は常時公開している。ガイドは「猿島公園専門ガイド協会」に属し、現在 32 人が活動している。観光客の多い土曜、日曜、祝日に猿島の休憩所に待機して、随時受付を行っている。個人から団体、メディア取材まで幅広く対応しており、猿島砲台跡の活用について中心的な役割を果たしている。

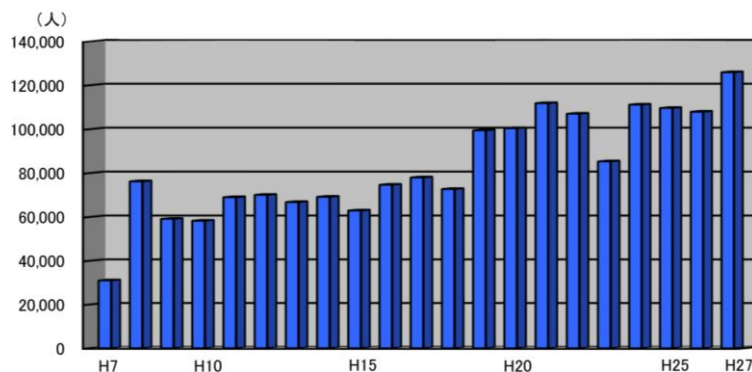


表5 猿島公園年度別来園者の推移

(2) 千代ヶ崎砲台跡

千代ヶ崎砲台跡は、公開のための保存整備が未着手で、現在は非公開の状態である。2016 年（平成 28 年）に海上自衛隊から横須賀市に史跡の管理が移管されたのを受け、10 月 25・27 日、2017 年（平成 29 年）1 月 21 日に見学会を開催した。事前申し込み制であったが、10 月開催が 70 人の募集人数に対して 140 人の応募が、1 月開催が 200 人の募集人数に対して 404 人の応募あり、市民の関心の高さがうかがえる。